內村鑑三著

# 小憤慨錄

上

明治三十一年十月發行

# 自序

小憤慨錄の名は『社會雜誌』記者が『東京獨立雜誌』に與へられし批評の言より來る。

余に大憤慨なきにあらず、之を衷に藏して心臟の張り裂けんとすることあり。然れども、之を表白するも、我が國今日の社會の之を納れざるを奈何せん、或は之を表白するを許さゞるを奈何せん、故に余は謹みて之を言はざるのみ。

大聲を發する能はず、故に小聲を發するのみ。

大砲を放つ能はず、故に小銃を放つのみ。小憤慨錄を以て大憤慨錄に代ふる余の心の苦しさよ。

此書は余が曾て諸新聞雜誌に寄送せし論文より成る。今之を蒐集するに當りて其再錄を歡諾せられし國民新聞社、開拓社、朝報社、警醒社、其他諸社の厚意を深謝す。

明治三十一年十月十八日

東京獨立雜誌編輯所に於て　内村鑑三

# 小憤慨錄（上卷）

## 目次


頁數

教育

○文學博士井上哲次郎君に呈する公開狀……一

○精神的教育とは何ぞ……二〇

宗教

○宗教の必要……三〇

○誤解人物の辯護……三九

○我が信仰の表白……四五

○基督信徒の特徴……六七

○永生の冀望……九三
○露國美術家ニコライ、ガイ……一〇二
文學
○文學局外觀……一二三
○米國詩人……一三三
○史學の研究……一三八
○傳記學の研究……一五六
○西洋文明の心髓……一六〇
○チャレース、ローリング、ブレース……一八一
慈善
○[illegible]よる慈善……一九四



# 小憤慨錄

内村鑑三著

文學博士井上哲次郎君に
呈する公開狀

足下

余は未だ足下と相識るの榮を有せず、只東洋の一大哲學者として常に足下の雷名を耳にせしのみ。然るに近頃足下が「敎育と宗敎の衝突」と題して長論文を『敎育時論』に投せられ、基督敎の非國家的なるを辯せらるゝに際し、余に關する事柄を多く引用せられしに依り、余は已むを得ず此公開狀を

足下に呈せざるを得ざるに至れり。

余は斯の如き論文が足下の手より出でしを喜ぶものなり、若し凡僭躐の作ならんか、余はこれに答ふるに術なかるべし。然れども哲學的眼光を有する足下とあれば、余は事物の研究に於て公平なる學術的論法を足下より請求し得るなり。

然れども余は今足下の如き長論文を綴る閑暇もなし、又その必要もなかるべし。基督敎非國家論に就ては已に公論のあるあれば、今茲に余の重複を要せず。基督敎は歐米諸國に於て衰退しつゝありとの御說は、萬々一事實なりとするも、是亦余の辯解するの必要なし。何となれば余は歐米を眞似せんとするものにあらざればなり、彼は彼なり、我は我なり、



此點に就ては、余は足下に倣うて歐米の糟糠を甞めざらん事を勉むるものなり。

然れども足下の論法並に論旨に就て、余は少しく足下の再考を要求せざるを得ず、足下願くは哲學者の公平を以て余の注意を看過する勿れ。

足下は哲學者として堅固なる事實の上に足下の論旨を建てられたり、足下は空想虛談に依らずして、耳目を以て證し得べき歷史的材料を以て足下の論城を築かれたり、誰か足下の注意深き歸納法に服せざらんや。然れども其事實の選擇法に至りては足下甚だ疎漏ならざりしか。余が足下に申すまでもなけれども、反對黨の記事のみを以て歷史上の批評をなすべからざるは史學の大綱なり。天主敎徒の記事に

のみ依りし獨逸三十年戰爭史は不公平なる歷史なり、北部合衆黨の記事にのみ據りたる米國南北戰爭史は史學上の價値を有せず。然るに足下が余輩基督敎徒の行跡を評せらるゝや、多くは余輩の正反對黨の記事にのみ依らるゝは如何。余の第一高等中學校に於ける勅語禮拜事件に關して足下の引用せらるゝ記事は、實に基督敎に對して常に劇烈なる憎惡の念を有する眞宗派の機關雜誌なる『令智會雜誌』なり、或は『天則』なり、或は『日本』なり、或は『九州日々新聞』なり、或は『佛敎』雜誌なり。皆基督敎に對して敵意を挾むにあらざれば、常に之を貶見賤視する新聞雜誌なり、憑るべからざるは新聞紙上の記事なり、況んや反對者に關する記事に於てをや。若し後來足下の言行記を編纂する者ありて、足下と主義を



異にせる新聞雜誌が、足下に關し登載せる所のものを以てせば、足下以て如何となす。

余は他の記事に就ては眞僞を保證する能はざれども『令智會雜誌』の余の第一高等中學校禮拜事件に關する報知は、誣ふるの最も甚しきものと謂はざるを得ず。余が尊影に對し奉り敬禮せざりしとは全く虛說に過ぎず。拜戴式當日に生徒敎員とも尊影に對し奉りての禮拜を命ぜられし事なし、只敎頭久原氏は、余輩に命じて一人づゝ御親筆の前に進みて禮拜せしめしなり。而して其記事中「斯かる偶像や文書に向ひて禮拜せず」云々の語は、余の發せし語にあらざるなり。又「前非を悔いて」との言は、時の事實を云ふにあらず。余は禮拜とは、崇拜の意にあらずして敬禮の意なる事を木下校長

より聞きしにより、喜んで之をなせしなり、又爾來もこれをなすべきなり。故に「決して眞心にあらざるの」云々の語は、余の眞意を云ふものにあらず、其「免職」云々に關しては讒謗の最も甚しきもの、校長の余に對するや、常に同僚の禮を以てせられ、余も亦同氏に對し決して惡感情を有せしことなし、余は奸賊として放逐せられざりしなり。

然れども是れ余一個人に關する事實なり、余は玆に夫の第一高等中學校事件に就て、余を玆に辯護せんとするものにあらず。余の玆に之を言ふは、足下が事實の探究に甚だ疎漏なりしを示さんが爲めなり。哲理的歷史は、斯の如き不公平不完全の材料を以て建設し得べからざるは足下の能く知る所なり。



足下の基督敎徒が我國に對し不忠にして、勅語に對して不敬なるを證明せんとするや、該敎徒が儀式上足下の注文に從はざるを以てせられたり。然れども玆に儀式に勝る敬禮の存するあり、即ち勅語の實行是なり。勅語に向ひて低頭せざると勅語を實行せざると不敬孰れか大なる。我聖明なる天皇陛下は儀式上の拜戴に勝りて實行上の拜戴を嘉みし給ふは、余が萬々信じて疑はざる所なり。

畏れ多くも我 天皇陛下が勅語を下し賜はりし深意を推察し奉るに、 天皇陛下は、我等臣民に對し、これに禮拜せよとて賜はりしにあらずして、これを服膺し、即ち實行せよとの御意なりしや疑ふべからず。而して足下の哲學的公平なる眼光は、余輩基督敎信徒を以て、佛敎徒よりも儒者、神

道家、無宗教家よりも、我國社會一般公衆よりも、勅語の深意に戻り、國に忠ならず（實行上）、兄弟に友ならず、父母に孝ならず、朋友に信ならず、夫婦相和せず、謙遜ならざるものとなすか、不忠不孝不信不悌不和不遜は、基督教信徒の特徴とせず。

足下は余が勅語を禮拜せざるが故に、余を以て日本國に對して不忠なるものとせり。然れども店頭御尊影を他の汚穢なる繪畫と共に鬻ぐものは如何。朝に御眞影に向ひて嚴肅なる禮拜を呈しながら、夕に野蠻風の宴會に列する者は如何。加之ならず肅々として勅語に禮拜するものが盃を把りて互に相談ずるや、余輩聞くものをして嘔吐の感を生ぜしむるものあるは、未だ足下の耳にも目にも留まらざるや。若



し余をして足下の如く新聞雜誌の記錄を以て余の論城を築かしめば、余は教育の本源たる我文部省に就ても、足下の職を奉せらるゝ我帝國大學に關しても、若しくは足下の賞贊せらるゝ佛教各派の現時の實況に就ても、余は足下をして二三日も打續きて尙は通讀するを得ざる程の非國家的反勅語的なる醜聞怪說を足下の前に陳列し得るなり。否、若し余をして少しく復讐の念を生ぜしめ、新聞雜誌より足下自身に關する記事を摘用せしむるならば、余は文學博士井上哲次郎君を以て、至誠國に盡し、恭謙己を持し、勅語の精神を以て貫徹せられたる東洋の君子として書くことに甚だ困しむなり。

勅語發布以來我國教育上の成績は如何なるものありや。日

本國の敎育社會は、勅語發布以來その不敬者を責むるに喧噪なる割合に道德上の進步ありしや。學生の勤勉恭謙は、發布以前に比較して今日は著るしき進步ありしや、敎員の眞率儉節、その學生に對する愛情犧牲の精神は、前日に比して幾何の進步かある。若し新聞紙の報ずる所を以て十の二三は眞に近き者とするとも、尙は余輩民間にある者より之を見るときは、日本帝國現時の敎育界は勅語の理想と相離るゝ甚だ遠し。學生が敎師に對する不平、敎師が學生に對する不信切、理事者の不仕末等、余輩の耳朶に達する反勅語的の事實何ぞ斯の如く多きや。不敬事件よ、不敬事件よ、汝は第一高等中學校の倫理室に於てのみ演ぜられざるなり。

足下は曰く「耶蘇敎徒は多く外國宣敎師の庇蔭を得て生長



せしもの故、甚だ愛國心に乏しきなり」と。是れ足下の觀察にして、余は是に悉く同意を表するを得ず。然れども其事實問題は他日に讓ることゝし、余は玆に余の觀察を足下の前に開陳せざるを得ず。即ち「足下の如き尊王愛國論を維持する人士は、多く政府の庇蔭を得て生長せしもの故、甚だ平民的思想に乏しきなり」との事なり。廣く目を宇宙の形勢に注ぎ、人權の重きを知り、獨立思想の發達を希望するの士にして、足下の如く重きを儀式上の敬禮に置き、實行上の意志如何を問はざる人は何處にあるや。足下は余輩の不敬を責むるに當りて足下の材料を、重に佛敎の機關雜誌より得るの理由も、蓋し玆に存せずんばあらず。足下の尊王愛國論は、政府の庇蔭の下に學を修め、今猶は官祿に衣食するものにあら

ざれば、或は神官諸氏の如く、或は僧侶諸君の如く、其消長は大に足下の稱する尊王愛國論の盛衰如何に關するものを除きて、他に多く見ざる所以のものは抑も何ぞや。勿論普通感念を有する日本臣民にして、誰か日本國と其皇室に對し、愛情と尊敬の念を抱かざるものあらんや。然るを愛國心は己の專有物の如くに見做し、余輩の行跡を摘發して愛國者の風を裝はんとするが如きは、阿世媚俗の徒も喜んで爲す所なり、足下の如き博識の士は、勿論不偏公平眞理を愛する念より、余輩を攻撃せらるゝかなれども、足下の如き論法を使用し、足下の如き言語を吐かるゝの士は、多くは爵位官祿に與かる人に多きを見れば、余輩民間にあるものをして、所謂尊王愛國論なるものも、又自己の爲めにする所ありてな



すにはあらざる乎の疑念を生ぜしむるは、決して理由なきにあらざるなり。足下願くは余の疑察(サスピシヨン)を恕せよ。余は唯足下が余輩に加へられし疑察を足下に加へしのみ。而して若し足下の稱する尊王愛國論は、必ずしも阿世媚俗の結果にあらずとならば、(而して余はその必ずしも然らざるを知る)其同一の推理法を以て、余輩基督信徒も、外人の庇蔭に依るが故に、基督教を信ずるにあらざるを知れ。

足下は基督教の教義を以て、勅語の精神と并立し能はざるものと論定せられたり。若し足下の論結にして確實なるものとすれば、基督教は日本國に於て嚴禁せらるべきものにして、耶蘇宗門禁制の表札は、再び日本橋端に掲げらるゝに至らん。帝國大學に職を奉ずる基督教徒を始めとし、我帝國

政府部内にある基督敎徒は、直に免官すべきなり。足下已に足下の持論を世に公にせられたり、而して誠實なる日本國民として、眞理を重んずる學者として、足下は輿論のクルセードを起し、基督敎撲滅策を講せざるべからず、足下の責任も亦大なる哉。

然れども余は又足下に一の注意を與へざるを得ず。茲に基督敎に勝る大害物の我國に輸入せられしあり、即ち無神論、唯物論是れなり。足下の論文に依りて見れば、足下はハーバート、スペンサーに對し多分の尊敬と信用とを置くが如し。ミル、スペンサー、バックル、ベジヨウ等の著書は、我國西洋の學者の夙くより嗜讀せしものにして、今日の日本を造り出すにつきて、是等英國碩學の著書が與かりて大勢力ありし



は、蓋し疑なき事實なり。而して足下の公平なる哲學的眼光は、唯物論と勅語とは并立し得るものと信ぜらるゝや。余は試みに茲に一二の實例を擧げて、足下の敎訓を乞はんと欲す。スペンサー氏の代議政體論は、我國英語研究者の敎科書として廣く用ひらるゝ書なり、その需要の大なるや、數種の飜刻を市上に見るに至れり。我國幾萬の子弟は、此書を讀みつゝあるなり、而して其獨裁政治を論ずるや左の語あり。

........It (the instinct of subordination) has been the parent of countless crimes. It is answerable for the torturing and murder of the nobleminded who would not submit—for the horrors of Bastiles and Siberias. It has ever been the represser of knowledge, of free thought, of true progress. In all times it has fostered the vices of courts, and made those vices fash

-ionable throughout nations. ......................... Whether you read the annals of the far past—whether you look at the various uncivilized races dispersed over the globe—or whether you contrast the existing nations of Europe; you equally find the submission to authority decreases as morality and intelligence increase. From ancient warrior-worship down to modern flunkeyism, the sentiment has ever been strongest where human nature has been vilest.

余は茲に余の拙劣なる飜譯を附し、此公開狀の讀者にして英語を解せざる人の爲めにす。

服從の性(即ち君主政體をあらしむるもの)は、無數罪惡の原因となり、高潔の士にして服從を肯んせざる者を拷問殺戮し、バスチル、シベリヤの慘狀を演せしめしものなり。



是れ智識、思想の自由、眞正の進歩の歷抗者なり。是れ何れの時代に於ても、王室の弊害を釀し、此弊害をして國內に流行せしめしものなり。……………過去の記載に依るも、地球面上に散布せる未開人種を見るも、歐洲今日各國の狀態に對比するも、主權に對する服從は、道德と智識の增進すると同時に減退するを見る。昔時の武勇崇拜より今日の「オペッカ主義」(Elunkeyism)に至る迄、此服從の精神は、人性の最も鄙劣なる所に最も强し。

而して是れその最も甚だしきものにあらざるなり。その前後二三ページに涉る記事を見よ、而して如何にして「天壤無窮の皇運を扶翼すべし」との勅語と幷行し得るかを余輩に辯明せられよ。

余に若し時と餘白とをあらしめば、余はウォーター、ベジョウの究理政治論より、ミルの代議政體論、其他バックル、ペイン、ボルテヤ、モンテスキウ等の著作より、我國の尊王心を全然破壞するに足るべき章句を引用し得るなり。宜なるかな、我文部省は一時官立諸學校に令して、前述のスペンサー氏代議政體論を教科書として使用するを禁ぜられたる事や。

我國佛蘭西學者の中に最も愛讀せらるゝルソーの民約論(Contrat Social)は、皇室の尊榮を維持するが爲めには害なきものと信ぜらるゝや。歐米の學者にして基督教を攻擊せし記者は、多くは王政をも攻擊せしものなることは足下の知る所なり。然るに基督教を以て我國體を顚覆するものとして嫌惡する我國の教育者が、ベジョウ、スペンサー等を尊拜す



るは、余の未だ了解し能はざる所なり。

昔時羅馬の虐帝ニーロは、手から火を羅馬の市街に放ち、其煙焰天に漲るを見て一夜の快を得たり。然るに後、公衆の疑念と憤慨との其身に鍾るを見るや、直に基督教徒を捕へ、罪を彼等に歸して、彼等を殺戮せりと。今日我國の西洋學者も亦ニーロ帝を學ばんとするものにあらざるか。世の輕薄に進み、禮義廉恥の地を拂ふに至りて、其罪を基督教徒に科せんとするものは誰ぞ。

日本は足下の國にして又余の國なり、僞善と諂媚とは何處に存するとも、共に力を協せて排除すべきなり。然れども輕卒と疑察とは、志士の共同を計るに於て用なきなり。我等恭謙なる日本國民として、注意深き學者として、公平なる觀察

者として、他を評するに寛大なるべく、事實を探るに精密なるべく、結論に達するに徐かなるべきなり。足下此公開狀を以て、足下の所謂「一々答辯を爲すほどの價値あるものにあらず」と爲さず、余に敎訓を垂るゝあらば、豈余一人の幸福のみならんや、不備。

明治二十六年二月大阪に於て　（敎育時論）

## 精神的敎育とは何ぞ

敎育已に精神的事業なり、然るに殊更に之に精神的なる形容詞を加ふ、是れ自我の宗敎を眞宗又は正敎と稱するの類、世が愚昧にして正邪を顚倒するにあらざれば、之を唱ふる者の自足自尊を示すもの、斯の如き熟語が世に現はるゝに



至りしは、國家の爲め決して賀すべき事にあらず。

何をか精神的敎育と謂ふ。

學生に束縛的禮拜堂出席を命じ、バイブル敎育を課し、凡ての手段を以て荐りに彼等に改宗を勸め、以て精神的敎育となすものは、重もに外國敎師の助力に由りて成りし我國に於ける基督敎的諸學校なり。

我國固有の道德を養成すると稱して、支那の聖人の書を講し、和漢古代の忠臣孝子の事跡を誦し、愛國心を發揚すると稱して、頻りに我國の美を賛じて外國を卑下し、以て精神的敎育となすものは、國家主義を以て世に誇る我國今日數多の學校なり。

然れども、バイブル敎育必ずしも精神的敎育ならず、世界精

神の經典なるバイブルも、之を學科的に義務的に壓制的に强ひて、全く其利と用とを失するに至る。自由の領土にのみ德性あり。精神を束縛的に吹入せんと欲するものは、拷問廷の制度を以て宗教を强ひし古代の天主教徒の類のみ。故に往々にして精神的教育を以て自任する基督教的學校にして、最も非精神的最も無氣力的最も屈辱的たるに至る事あるは、余輩の屢々目擊する所なり。義に勇なるに勝りて禮拜堂の出席は賞美せられ、正直なるに勝りて聖書の字句的暗誦は重んぜられ、軟弱能く外人の鼻息を伺ひ得て、彼等の老婆的意氣に投ずるを以て善人なりと稱せられ、熱心家と崇められ、聖書の教訓を實行せざるも、常に出づるに聖經一冊を小脇に挾み、語るに聖語を引用し、寢るに聖書に枕し、亦時



には小牧師の樣を演し、世人に向ひて彼等の愚想を說けば、精神的教育の目的は達せられし事となす、自欺の極、誤謬の極、宜なるかな我國人の本能は、能く是等基督教學校の拙と劣とを觀破し、其職員の高識なるに關せず、其教具の整備するに關せず、世の有望高潔の士にして、來りてこゝに學ぶもののは年に減少するの徵あるは。宣教師の目的は、宗教傳播にあり、其教育事業に從事するは、宗教傳播を扶けんが爲なり。此目的を以て教育に從事する已に非精神的なり、彼等の教育事業の擧がらざるは宜なり。彼等は精神的教育の名を藉りて、彼等の宗教的教育を施さんと欲するものなり。之を宗教と稱せずして精神と謂ふ。彼等は社會を欺かんと欲するか、將た社會の忌避を懼れて此雙關(アムビギュアス)的名稱を用ひしか。精神

的敎育の語、今は世人の戯語となりて存す。其此惑を起さしめしものは、何人か最も與かりて力あるぞ。
宗敎家の非精神的敎育者の狹量機械的なるあり、二者全く其發表する主義を異にするもの、前者が博愛を唱ふるに反して、後者は愛國を以て誇り、前者が柔和を求むれば後者は剛强を貴び、前者の音樂會に對して後者の劒舞會あり、前者讃美歌を奏して後者は軍歌を叫ぶ、前者は國民敎育が養德を欠きし時に與りしもの、後者は國家思想の頽廢を憤りて起ちしもの、二者共に反動の子供なれば、其外觀を全く異にするに關せず、其本質に於ては相類似する所甚だ多し。
束縛的に支那の論語敎育を課し、機械的に忠臣孝子の傳を



暗誦せしめ、兵隊的に敵愾心を喚起し、以て東洋の君子を作り出さんとする、是れ今日我國に稱する國家敎育の思想なり。故に國自慢は愛國心として信せられ、儀式的服從者は忠臣孝子として譽め立てらる。十九世紀の今日、延喜の菅公、延元の正成を其儘模範とするにあれば、古哲の心は解せられずして其言行は倣ふに難し。此種の敎育亦宗敎的敎育に類して、僞善者養成に最も屈强なる機關なり。そは二者共に外より內を抑へんとし、無限の膨脹力を有する心靈を、人爲的模型の內に壓嵌せんと勉むるものなればなり。ジョン、スチユーワート、ミル曰く、

內部の確信に基く道德が、外部の標準に訴ふる道德に對「する爭鬪は、進步的道德が、停滯的道德に對する爭鬪にし

て、是れ實に道理と理論とが、時流の意見と俗習とに對する爭鬪なり。

と。是れを希伯來人の聖書にするも、是を支那人の經書にするも、道德の標準を吾人の確信以外に取るは、停滯的道義なり、媚俗的倫理なり。

何をか精神的敎育と謂ふ。

精神に充ち盈ちたる敎師が學を授くる是れ精神的敎育なり。精神は感ずべくして學び得べからざるもの、是を學科的に授けんと欲す、是れ古來より今日に至る迄、精神の美と善とを知りて之を己に有せざる敎育家が常に取り來りし方法なり。ファラデーの理化學は精神的なりしなり。リッテルの地理學は精神的なりしなり、アガシの動物學は精神的な



りしなり。彼等が精神的敎科書を用ひしにあらずして、彼等自身が精神的なりしが故に、精神的敎育は行はれしなり。敎師精神に欠乏して、聖經晝夜の誦讀も、以て其功德を一學童に及ぼす能はず。敎師精神に盈ちて、木石に聲あり山河に心あり。彼に接するは精神を感受する事にして、彼れ在りて精神的敎育あり、彼去りて萬卷の聖書と神皇正統記と太平記とは、一聖人と一愛國者とを造る能はず。「生は生を生む」てふ生物學上の單原理は亦敎育上の常則なり。精神精神を生む。余輩は此單元明に過ぎるの一事が、未だ充分に敎育者の腦裡に透徹せざるを見て、常に驚愕に堪へざるなり。

抑々精神的敎育の誤解たるや、精神其物の誤解より來れり。精神とは必ずしも悲歌慷慨大言壯語して吾人の感情にの

み訴ふるを謂はず。精神とは物の靈なり、則ち宇宙を繫ぐ正氣なり、則ち物理(Physical law)として物質界に現はれ、生(Life)として動植物に働き、道として靈なる人を支配するものなり、即ち詩人ウォーズウォルスの所謂

A spirit that impels
All thinking things, all object of all thought
And rolls through all things.

なり。而して吾人の心志、此宇宙の大氣に接して吾人の思惟は萬物と和し、吾人の行爲は自然に洽ひ、乾坤我を扶けて、我は天地と共に働くに至る。哲學者カントの所謂「汝の行爲をして宇宙の運行と和合せしめよ」との言は、此意を謂ひしに外ならず。故に物理學を學理的に攷究する亦精神的なり、精



密に正直に動植物の特性を探る亦均しく精神的なり、歷史を學ぶに事實を重んじ、傳說口碑を輕んずる、亦同じく精神的なり。精神的たるは正直なるなり、正義に勇なるなり、眞理に忠なるなり、眞面目なる謙遜なる大膽たる心を以て、宇宙萬物に對するを謂ふなり。即ち物に據りて物の理を究め、物の爲めに物を究めざるを謂ふなり。之を精神的教育と謂ふは、外形的虛式に反して謂ふなり、利慾的意嚮に反して謂ふなり。凡て醜なるもの、凡て粗なるもの、凡て陋なるもの、凡て卑なるもの、凡て不實なること、凡て浮虛なること、皆悉く非精神的なり。教師の不深切なる、學生の懶惰なる、學事の擧がらざる、研究の進まざる、皆悉く非精神的なり。精神的教育ならんか、即ち正實なる教育なり。余輩の精神的教育を解する

斯の如し。

（國民之友）

## 宗教の必要

我若し神ならんか、宗教の要我になかるべし、我若し禽獸ならんか、我は宗教なくして可ならん、我は人なればこそ我に宗教の要はあるなれ。

そは神は彼自身にて完全なるものなり、彼は彼の理想に應ずるの力を有し、彼れ思うて事成り、言うて物造らる、絶對孤立自得の彼は、他に據るの要なきが故に、宗教の要あるなし。禽獸は彼の力に應せざる慾と望とを有せず、彼は力の及ぶ丈け欲し、彼の慾望は彼の力量を以て限らる。故に彼亦彼自身にて滿足し得るもの、他に求むるの要なきが故に、宗教の



要を感せざるなり。

然れども人は平均を欠くの生物なり。彼の理想は常に彼の力量に勝り、彼は彼の能はざる事を望み、彼の及ばざる所を欲す。禽獸的の器に容るゝに、天使的の靈を以てせしものなれば、彼の兩性が化合して、一が他を同化するに至る迄は、彼に宗教の要あるなり。

余輩宗教を解する此の如し。人の宗教とは彼の人生問題の解釋なり。人生てふ秘密、彼若し何れにか之を解せざれば、彼の一生は苦痛の極なり。彼の禽獸性を以て人生の最大原理と見做さん乎、是れ亦一つの解題にして、全く耐ふべからざるの宗教にあらず。鼠小僧の宗教は此の如きものなりし、石川五右衛門の宗教も亦然り。彼等は靈性の存在を否定し、良

心の譴責を人性の懦弱に歸し、德義は迷信の一種と解し、彼等の禽獸性を高めて、彼等の靈能智能をして悉く之に服從せしめたり。

彼等は人生を解して曰く「人とは智能を備へたる禽獸なり、彼の犬猿に勝るは、犬猿が魚鳥に勝ると同じ、禽獸に力の加へられしもの是れ人なり、故に同一律の二者の行爲を支配すべきありて、人は殊更に禽獸に異なるの律を守るの要なし」と。

是れ石川五右衛門と彼の敎會の信仰箇條なりき。鼠小僧之を固守して刑せられ、ルッソー之を唱へて佛國革命起り、ナポレオン之に和して歐洲震ひ、而して其優想麗詞の裡に物質的哲學として世に唱導せらるゝや、ジェイ、グールド出て、鉅萬



の富を致し、盜賊紳士白日に橫行して、義者は口を閉づるに至る。禽獸敎利慾主義、是れ亦世界の大勢力なり。人生問題の解析を此敎に求むるもの、開明の今日決して尠しとせず。

禽獸敎は極端主義なり、其直截的に人生を解すると同時に、之を尊信實行するには、非凡の勇氣と膽力とを要す。故に世間之に心服するもの多しと雖も、之を唱道決行するものは至て稀なり。世人の多くは極端主義を忌むものなり、彼等は、天使的良性に超越權を附與するの勇氣を有せざると同時に、亦全く禽獸性に服從することを敢てせざるものなり。故に彼等が人生問題に對するや、之を不問に措かんことを勉む。而して會々不幸艱難の身に迫るありて、其解析を彼等に促すあれば、彼等は彼等の內に存する疑問性を惱殺せ

ん事を勉む。彼等は曰ふ、

人生問題は到底解し得べきものにあらず、古今の大人君子、一人として滿足なる解釋を之に與へしものなし、何ぞ我獨り之を解するを得んや。麻糸の長し短かし六つヶ敷しや、有無の二つを如何で分たん、若かず此の如き問題に心を勞せざるに、天運苟如此、且進盃中物。

と。余輩は云ふ、是れ亦一種の宗教にして、人生を解すべからざるものと解せしものなりと。彼等の祭禮に催眠的藥劑を要する多し、酒精は其最も緊要なるもの、煙草之に次ぎ、樂器小說亦要具なり。彼等は物の變化の內に、靈肉兩性の衝突を忘却せんと勉むる者なり。春若し長久に春ならん乎、彼等は苦痛を感ずるものなり、秋は長く秋たるべからず、寒暑の變



動は彼等の無聊を癒すものなり。彼等は旱天に降雨を祈りて、雨來りて復た晴天を欲するものなり。彼等の生涯は全く消極的なるが故に、斷腸の憂を感せざると同時に、上天的の歡喜に觸るゝ事なし。

無頓着敎信者は、世の最多數を占むるが如し。彼等は羽翼を褫られたる鳥の如く、登らんと欲して登り得ざるもの、彼等は危險を恐れて人類の特權を放棄せしものなり。人生の難問題は、放棄せられんが爲めに吾人に供せられしものにあらず、恰も敎師が難題を以て學生を試むるや、其之を不問に措かんが爲めにあらずして、其之を解し、解するに依りて智能の鍛錬を增し、以て此世に處するの道を會得せんが爲めなるが如し。人生問題放棄せられて、人生は其眞味を失ふに

至る。否其結果は爰に止まらざるなり。人生問題を解せざるものは人世に於ける落第生なり。彼は之を解せざるが故に、死するものなり。聞く昔時希臘にスフィンクスなる女神ありて、彼女の提出せし質問に答へざるものは、直に捻へて殺せしとかや。人生問題に答へざるものは、之に誤謬の答辯を與へしものなり。解せざらんか殺さるべし、無頓着主義は常に死滅の前兆なり。

是に於てか吾人は眞正の宗教を要するなり。即ち吾人人類の理想を信じて之を實行するにあり。即ち吾人の靈性の要求する所を以て、吾人處世の標準となし、禽獸性の之に予盾するあれば、之を壓し、之をして終に靈性に同化せしむるにあり。是れ普通感念を有するものは、何人も承認する所なれ



ども、其難きが故に、多くは避くる所なり。余輩の宗教の定義は甚だ簡單なり。即ち正義の實行是なり。之を人と宇宙との關係なりと云ひ、神と人との關係なりと云ふと雖も、之を實際的に解すれば、余輩の定義に外ならざるべし。

正義の實行、是れ難中の難なり。而して宗教は、吾人の迷夢を排し、吾人の弱きを助け、吾人の冀望と命數とを示し、吾人に正義實行の道を開くものなり。宗教必ずしも善行を平易ならしむるものにあらず。然れども其純粹倫理學と異なる所以は、後者は人道の何ものなる乎を示すに止まりて、前者は之を行ふの動機と快樂とを供す。正義其物は强迫的にして其實行は苦任なり。宗教は正義を美ならしめ、其實行を樂しからしむ。故に宗教を稱して審美的倫理となすも可ならむ。

是に於てか說をなすものあり、曰く、道義已に美なり、何ぞ宗敎の之を裝飾するを要せん、且つ之を樂しからざらしむるに非ざれば、實行し得ざる人は、卑怯の最も甚しきものなり。是れ苦藥を服するに甘味の調合を要するものたりと。是れ方便的宗敎に對しては勢力ある議論なるべし。然れども事實其物を不問に附して、勉めて苦任に當らんとすることは、是れ智にあらず、勇にあらず。宗敎は人の本分を明かにし、彼の正義を行ふべき所以を示す。之を知りて之を行ふは、之を正しく行ふことなり。正義行はざるべからず、然れども勉めて之を苦行たらしむるの要なし。若し其理を究めずして實行するを勇なりとせば、冥闇の裡に國法に屈服する未開人は、其理を明かにして之に服從する開明人に優りて



勇なり。若し勉めて苦行するを以て勇なりとせば、汽車の便利に依らずして步行するものは勇なり。宗敎の要は、正義を美ならしむるにあり。而して其之をなすは、外形的裝飾を揑造附着するにあらずして、其眞美を發揚するにあり。宗敎は倫理の上達せしもの、二者の關係は鑛鐵と鋼鐵との關係なり。金剛石地を出でゝ未だ技工に接せざるものと、錬磨已に成りて光を王冠の上に放つものとの關係なり。吾人宗敎を要する所以は、正義を其粹に於て求めんが爲なり。

（六合雜誌）

## 誤解人物の辯護

'No grand survey of a period and selection of its events, such as is

demanded from the historian, is generally possible until the period itself has retired in some degree into the background."—Ewald, Hist. of Israel, I. 139.

人物の判決に三種あり、生存中の判決、來世の判決、歷史の判決是なり。第一は誤謬最も多く、奸佞も忠臣義士と見做さるゝあり、仁者も惡人視せらるゝあり、三種の判決中生存中の判決は最も兇るべからざるものなり。第二は最も確實なるものにして、綿羊と山羊と區別され、僞善者は眞善者と分離する所なり。然れども第三は第一に似て現世に於ける判決なるが故、確實とは稱すべからざるも、第二に類して未來の判決なるが故に、眞實に最も近きものなり。時は効力ある磨粉にして終に眞價値を現出せしむるものなり。



不幸人物ありトマス、ペーンと云ふ、十八世紀の終りに當りて貴族政治の腐敗を怒り、人權の重んずべきを主張し、時の政治と宗教とに反對し、本國英國を去りて米國に渡り、彼の鍵筆を以て革命思想を吐露し、銃を肩にして自由の戰場に臨み、佛國に使して新獨立國の財政を輔け、佛國革命の中に投じ、新政を賛助すると同時に極端共和黨の殘虐を責め、英國に歸りて國教の惡弊を攻擊し、又身を入るゝに處なくして佛國に逃れ、終に再び米國に渡りて死せり。此人時勢の解する所とならず、沒後百年間トム、ペーンの名は無政治無宗教の代名詞となれり。彼の著述に係る Rights of Man 並に Age of Reason は、勤王家並に宗教家の大禁物なりき。彼が死に際せし狀態は、常に懷疑者を戒め、基督教證據論に於て無神論

者の憐むべき結果として適用されし事項なりき。

茲に米人モンキユアー、ディ、コンウエーなる人あり、數年間英米佛の三國に於て廣くペインに關する事蹟を探究し、之を二卷の大著述となし「トマス、ペーンの言行錄」と題して世に公にせり。コンウエー氏のトマス、ペーンは余輩の聞慣れし者とは全く人物を異にし、此人は無神論者にあらずして「エホバの法を喜びて日も夜も之を思ひし人なり」と云ふ。此人の政治幷に宗敎に關する意見は、今日歐米の進步主義を採る學者の說と伯仲し、今日の自由的の英國を造出する上に於て、今日の神學說を發達さする上に於て、尠からざる功勞ありし人なりと。此人又黑奴の友人にして强硬なる奴隷廢止論者なり。彼に正義の爲めに身を捨つるの勇あり、又能



く衆說に反して弱者を辯護するの慈悲を有せり。曾て佛國革命の時、民心激昂してボーボン王を殺さんとせしや、此人立ちて衆に歎願して曰く「願くは王を殺すとも王其人を殺す勿れ」と。Kill the king, but not the man!。此人老年に及びて米國に歸り、心竊に米國民の歡迎を望めり、然れども米國は此自由の發達者を認めず、冷遇、憎惡、愚弄の內に彼をして此世を去らしめたり。今やコンウエー氏の同情的の筆に依りて此誤解人物は、十九世紀自由歷史の一偉人として世に現はるゝに至れり。他に彼を辯護するものは「ノース、アメリカン雜誌」上に於けるコロ子ル、インガゾル氏のみにあらずして、去る夏シヨートーカ夏期學校に於て幾多の高德名識の前にコル子ル大學敎授コイト、タイラー氏が「革命に於けるトマス、ペーン

文壇上の功績」なる論題に就て此誤解人物を辯護せし時に、一人として敎授に反對せしものなかりしと云ふ。

余輩勿論トマス、ペーンの欠點を知る、而して欠點なきの人は何處にかある。—彼は所謂ォルソドックス派の信者にあらざる事、彼の言語は野卑に失し、反對者を駁するに無遠慮なりし事等は、掩ふべからざる事實なり。然れども彼の今日迄彼の國人より受けし批評、基督敎會より被りし擯斥は、全く彼の受くべからざりしものなりしは、コンウェー氏の勤勞に成れる著述を以て定められたるが如し。取るべきは正義の道なり、守るべきは良心の聲なり。若し未來の裁判なしとするも、歷史は無辜の英靈をして永く誤解の中に埋め置かざればなり。



## 我が信仰の表白

（口述の筆記に據る）

余の友人横井時雄君は、『六合雜誌』に於て氏の信仰を表白せられたり、余輩は神學界動搖の今日に當りて信徒相互に其信仰に關して疑團を抱くに當りて氏の如く明白に信仰を表白せられたるを大に喜ぶものなり、余輩は斯の如きの文字の續々として宗教大家より出でむことを望むものなり、然して後始めて宗教思想の動搖も鎭靜に到る可く、信徒相互の誤解も解く可きなり。余の如きは勿論横井氏の如く宗教界に於て顯要なる位地を保つ者に非ず、余の信仰の確實なるとならざるとは其及ぼす所の影響甚だ狹少なるものなり。然れども余も亦基督の一信徒と自信するものなれば、亦據る所の確信なきにあらず。因て今横井氏の例に倣ひ、又氏の勸めに從ひ、爰に余の信仰を表白することゝせり。世間幾多の人士中、余の如き境遇にありて亦余の如き信仰を維持せらるゝ者が、余の表白によりて少しなりとも慰めと力とを得らるゝあらんには、余の幸之より大なるはなし。

余は余の信仰を表白せんとするに當りて余の靈魂上の歷

史の大畧を述べざるべからず。保羅加拉太人に書き送りて曰く「兄弟よ我爾曹に示す、我曾て爾曹に傳へし所の福音は人より出づるに非ず、蓋われ之を人より受けず亦敎へられず惟イエスキリストの默示に由りて受けたればなり（加一〇一一、一二）」と。余の基督敎を學ぶも亦然り、之を余に敎ふるの牧師も宣敎師もあらざりしなり。余は札幌に在りて農學研究中、不圖基督敎に接するを得たり、爾來余は余の友人と共に基督敎書類數十部の助けによりて之を研究せしのみ。

北海道に在留中は、余の宗敎心を養ひしものは、重に山川風月と草木鳥獸等、總て自然物なりし。余は博物學の研究に從事し居たれば、余をして萬有の神に近づけしめしものは、實に北海の自然物と謂はざるを得ず。余は東京に來りて以來、



又米國に在學中、有名なる宗敎家に接せざりしにはあらざれども、是等の人士が余の靈魂に及ぼせし所の勢力は、聖經一冊を懷にして、獨り石狩の平原に漂泊し、又北海の濱に漁夫の疾苦を訪ひ、水產動物上に顯はるゝ神の光榮より得し所の効力に比すれば、實に僅少なるものと謂はざるを得ず。

然れども若し余の信仰上に一大影響を與へし人を指名せむとならば、余は第一にアマルスト大學敎頭シーリー氏を指名せざるを得ず。余は氏の人物風采に於て余の理想的基督敎の顯出を見たり。氏の赤子の如き信仰と柔和なる事とは、余をして品格は人間の價値上智識の上に位するものなることを知らしめたり。余はシーリー氏に於て眞正の基督（クリスチャン）

教的君子(ジェントルメン)を見認めたり。又余が基督信徒として世人に對するの思想に於て、余に非常の感覺を與へし人は、有名なる白痴教育者ジエームス、ビー、リッチャード氏なり。氏はユニテリヤン教會の信徒なりしと雖も、氏の博愛熱心自忘の精神は、余をして氏の前に小ならしめたり。其他余の師恩を被むりし人少からずと雖も、今之を爰に記せず。

余は神學校に在りしことは僅に三ヶ月なれば、神學てふものは未だ學ばざるものなり、又神學に關する書籍を研究せし事甚だ罕なり。余の信仰を裨益せし歷史的人物を指名せむとならば、余は第一にセント、アウガスチンを指名せざるを得ず。氏の「表白(コンフエッション)」なる書は余の數回熟讀せしものにして、今日も尚は余の第二のバイブルとして貴重するものなり。余



は路錫(ルーテル)の事蹟を特に研究するを好めり。路錫に關する傳記類にして余の手に接せしものは、余は之を通讀せずして看過せしことなしと信ず。殊に氏の加拉太書の註解は、余をしてプロテスタント教の基礎を知らしめしものなり。余はジヨン、バンヤンの言行記幷に天路歷程に依りて、余の靈魂上の經歷は、決して空想のみにあらざる事を知りたり。余はコロンウエルの傳記に依りて、基督教の愛國心に及ぼす勢力を見認めたり。余はダビド、リビングストンの傳記に依りて、基督信徒の理想的生涯なるものを見認るを得たり。其他ヘンリー、マルチン、キルク、ホアイト、テビト、ブレナード等は、常に余の先輩と見認る人にして、彼等の言行は常に余を慰め余を勵ますものなり。

余の米國在留中、養育院、瘋癲病院、其他慈善に關する事業を巡視し、亦聊か之に從事せし事は、余に基督教の博愛廣且大にして實力あるものなることを知らしめたり。因りて余は社會の改良も國家の進歩も、之をして動かす可からざるの基礎に置かむと欲すれば、基督の眞理に憑らざる可からずとの確信を起したり。

余は聖書の研究を好む者なり。嘗て札幌に在りて友人諸氏と共に始めて之を繙きし以來今日に至るも、尚は余の座右を離れざるものは聖書なり。余は性來物に厭き易く常に一物を長く手に取り之を研むるの力薄き者なりと雖も、聖書のみは未だ嘗て余を倦怠せしめしことなし。余は其歷史に於て最も面白き談話並に歷史上の事實を得其詩歌は余の



種々の感情に訴へて高尚の快樂を供し、其預言書は常に余をして余の日本國を眞實に愛さしめ、其福音書は余が己の罪を感ずる時の唯一の隱れ場となり、其保羅の書簡は余の信仰上の教科書となり、其默示錄は余が世界の歷史を研究する時の指南車となれり。故に若し爰に人有りて世界に存する數億卷の書類中余に唯一冊の書を擇ぶべしと言ふ者あらば、余はダルウィンの原種論を措きてライブニッツの「セヲデシー」を措きて、余の常に大和魂の福音と稱して愛讀する太平記を措きて、余は古き古き「バイブル」を選ぶものなり。

余は何れの教會にも關係せざるものなり、余は創く在札幌大島正健氏、伊藤一隆氏、内田瀞氏等と共に、何れの宗派にも屬せざる日本的純粹獨立教會を設立するの榮譽にあづか

れり。余は同氏等と共に日本國をして基督教國たらしむるには、日本人自身其任に當らざる可からずとの説を維持せり、又今日尙ほ之を維持する者なり。余は日本人の思想に適する基督教は、日本人中より發生する者にあらざれば到底能はざることを信せり、又今尙ほ斯く信ずる者なり。故に余は有形の教會に關しては尙ほ未だ余の位地を定めざるものにして、余輩十數人の青年が、嘗て石狩森林に於て夢想せし理想的日本教會は、遠からずして蜻蜓州の表面に顯出せんことを望み且つ待つ者なり。

## 神學に關する卑見

基督の性、　基督は人なりしや神なりしやの問題に就ては、余は神學を研究せしことなければ、科學上の解析を下すこ



と能はず。然れども余は基督は人以上の者なることを信ずる者なり。基督は余の崇拜を受く可く、余は基督の前に祭壇を築きて、其上に余の身も魂も總て捧げ得可し。基督は余の主にして基督に使へる事は神に使へる事なり。若し斯の如き實在（ビイイング）を人なりと稱ふものあらば、余は之に向ひて異論を唱へざるべし、唯若し然りとすれば、余は余の今日維持する所の人(Homo sapiens)なる語の定義を變せざる可からず。然れども余は余の崇拜は神にのみ存ずるものなれば、余に取りては基督は人にあらずして神と同一なり、即ち神なり。

聖靈、　聖靈は余の心を叩き、余を教へ、余を慰め、神の者を取りて余に與へ、余を戒め、余を導く者なり。而して人は各自神と直接の關係を維持するの資格を持つ者にして、神は亦此

罪ある人の心に直接に降臨し給ふ者なれば、余の心中に見認る所の余以外の動力は、余は亦神として見認る者なり。神は慰め人となりて余の疾苦を宥め、師となりて余に神と宇宙の解釋を與へ、牧師となりて余を眞理の道に歩ましめ給ふ。余の聖靈に從ふ事は神に從ふ事にして、聖靈の聲を聞く事は神の聲を聞くことなり。故に余に取りては聖靈は神と同一なり、即ち神なり。

三位一體、ウエストミンストル信仰個條に曰く「神に三つの「ペルソナ」ありて各々同じ力と權力とを有す。然れども三個の神あるにあらずして、此三つの「ペルソナ」は同一體なり」と。此深遠なる個條に對して滿足なる哲理上の註解を與へんことは、到底人智の及ぶ所にあらざる可し。然れども智識



上の解析を下すの困難なるに關せず、三位一體說が基督教會歷史上今日まで幾多の攻擊を經て存し來りし所以は、其中に深遠なる理の存するあればなり。ユニテリヤン教信徒の此說に對する攻擊は二個の點に存す、即ち(一)吾等の理性に合はず(二)聖書に此說を載せずと。第一の駁擊に對しては余は曰はむ、三位一體說は我等今日の智識を以て理解し能はざる者なりと云ふに止まりて不道理の說といふを得ず。と。ハーバード大學に在りてユニテリヤン信徒中哲學の泰斗として仰がるゝ某教授の言に曰く「三位一體說は神の性を理解するに當りて最も滿足なる說なり」と。之を余輩の理性にのみ訴へずして余輩の全性（ホウルビーイング）より神を識認せむとする時は、三位一體說程余輩を滿足する說は他にあらざるべし。

第二の攻撃として常に指摘さるゝ題詞(テキスト)は、約翰第一書第五章七節なり。論者曰く「オルソドックス派の常に依り頼みし所の此一節は、聖書批評學者の既に棄却せしものにして、之を除きて他に聖書中三位一體説を維持するの題詞あるなし」と。余は今余の信仰を表白するに當りて批評學の問題に入ることを望まず、依て爰に余の常に尊敬するユニテリアン教徒中、聖書批評學者として錚々の名あるエズラ、アボット氏の言を引きて余の答辯に代へんとす。

"No Christian doctrine or duty rests on those portions of the text which are affected by differences in the manuscripts; still less is any thing *essential* in Christianity touched by the various readings. They do, to be sure, affect the bearing of a few passages on the doctrine of the Trinity;



but the truth or falsity of the doctrine by no means depends upon the reading of those passages".—*Anglo-American Bible Revision*, P.92.

罪惡說、　余は人類中神の前に義者一人もなきことを信ず。余は哲學者ライブニッツと共に創世記の記載する人類始祖墮落の記事は、人類の歴史を研究するに當りて最も著るき最も信用す可き記事なることを信ず。余は所謂始祖の原罪なるものを信ず、即ち人類は其始祖たる人類の代表者に於て既に神より離れたるものなることを信ず。余の信ずる所に據れば、基督教の所謂罪なるものは、窃盗、姦淫等を謂ふに非ずして、總ての罪の原因なる人類の神より離れて獨立せしことをいふなり(創世記三章五節並に二十二、二十三、二十四節を見よ)人其受造者(クリエーテツト)たるの位地を守り、創造者(クリエートル)に依頼する

間は、其全性を全ふするを得可し。然れども獨立す可からざるものが、一朝獨立するに及びては、遂に其位地を失ひ完全を缺くに到る。余が見る所によれば、聖書に所謂「世に義人なし一人もあるなし」との言は、即ち此神よりの獨立を謂ふものにして、必ずしも人類は全く善をなすの能力を失ひしと謂ふにあらず。故に此點より論究すれば、余は始祖の原罪なるものと共に、所謂「人心の全然墮落說」を信ずる者なり。

**贖罪說、** 余は既に罪の何たるかを述べたり、而して基督の贖罪とは、神より離れし人類を再び神に呼び返すの道なることを信ず。余は基督の十字架を除きて他に余をして神に返らしむる道あるを知らず。善をなし惡を避くるの道は、余は之を孔子より釋迦よりソクラテスより學ぶを得べし。然



れども罪の根源、即ち余の神より獨立せしことを止め、余をして再び余の造物主に返らしめ、之に依賴せしむる途は、基督の十字架を除きて他にあるを知らず。基督の十字架は第一、余をして基督の義人たることを知らしむ。第二余をして余の罪を喚起し之を悲しましむ。第三、余をして始めて神は余の罪を赦すの道を開き給ひしことを確信せしむ。是れユニテリヤン教徒の常に駁撃を試みる論點なり。曰く神若し其子を赦さむと欲せば、特に基督を苦しむるに及ばずと。曰く基督の十字架に憑らざれば人は赦されずとの說は、中古時代の古說にして、今日の人智を滿足するの說にあらずと。然れども論者如何に論ずると雖も、人の天然の性は變ずべからず、人の性に神の法律は萬世易る可らざるものなること

の意識（コンシヨスチス）あり、又如何に思想を凝らすとも、如何に善事を行ふとも、彼の心中に存ずる罪戻（ギルト）は、打消すこと能はずとの念あり。アウガスチン、ルウテル、バンヤン等、贖罪說を聞きて始めて心に安堵を得しめ、亦爾來幾多の信徒をして身を基督に捧げしめ、千辛萬苦を經て尙も基督に對する報恩の萬分の一をも盡す能はざることを歎ぜしめしものは、實に此贖罪說なりき。基督敎より贖罪說を取り去らむか、クロンウエルの偉業も出でざりしならん、ルウテルの改革も起らざりしならん、リビングストンの亞非利加紀行も出でざりしならん、アドニラム、ジヤドソンのビルマ傳道もなかりしならん、今日世界にある傳道事業も、其大部分は消ゆるならん、ジヨン、ハワードの監獄改良もエリサベス、フライの慈善事業も



出でざりしならん。若し基督敎の贖罪說なかりしならば、十九世紀文明は、生命なき身體の如く、精神なき人の如く、鈍き冷かなる一種の虛飾と化せむのみ。

**來世論**、　余は靈魂は肉體と共に朽ちざるものなるとを信ず。余は亦肉體の復活を信ず。復活を信ずるの理由は(一)歷史上基督の復活の疑ふ可からざること(二)基督の復活を疑ふに於ては千八百年來の西洋歷史を解すること能はざること(三)未來の存在に關する余の觀念を確實ならしむること是なり。余は之をつゝむの體なくして靈魂のみ存在することを思考（コンシーブ）すること能はず。然れども未來に於て靈魂が享くべき體は、如何なる質を有するものなる耶、又限りある人の靈魂が、如何にして限りなき生を有するを得る耶の點に至りて

は余の全く知らざる所にして、又人智の能く知り得ることにはあらざる可し。來世存在の觀念は、他の宗教上の觀念と同じく、理論のみを以て攷究探知し得可きものに非ず。是れ心の最も清き時、最も高尙なる時に、自然に湧出する觀念なり。詩家ウヲルズヲスの來世の説明、小説家ビクトル、ユウゴーの來世の希望、政治家ビスマークの天國の樂み、皆勃然たる本能性の告知なり。若し之をして實體なきの影と見過す時は、人世の最も優美なる最も高尙なる思想は、愚者の夢想と同視せらるゝに至らむ。チヤタム公曰く「巨人の言は價値ある議論なり」と。余雖來世論を唱ふるに當りて重に此種の議論に依らざるべからず。

聖書、 余は既に聖書嗜讀者の一人なることを表白せり。余



は聖書は神の人類に賜ひし特別の天啓なりと信ずるものなり。余は聖書は一言一句悉く誤謬なき神の默示とは信せざるなり。其年代の計算に於て、其歴史の記事に於て、其人名の異同に於て、多少の誤謬あることは慥かに認むるものなり。然れども余は聖書の書かれし時代を考ふる時に、其誤謬の著るく少きことを常に驚嘆する者なり。創世記の記事と地質學の結果と、一言一句悉く符合する者とは信せざれども、余は紀元前少くとも四百年前に當りて創世記の開闢論(コスモゴニー)の如く學理に符合せし記事の世に出でしことを驚く者なり。然れども余の聖書を以て神の特別の天啓と信ずる理由は、其歴史上の記事の正確なるによるに非ず、其詩歌の他の文學に秀て高尙卓越なるによるに非ずして、創世記より默示

録に至るまで一大思想の之を貫徹するによるなり。即ち宇宙萬有の創造者なる神は、我儕罪惡に沈みたる人類の父にして、我儕は直接に此神に近つくを得可く、又此神は我儕を限りなく愛する者にして、我儕彼より離れ、彼に反して罪を犯せし時は、彼は彼自ら世に下りて我儕を救へりとの無限無窮の愛心の聖書中に顯はるによるなり。此點に就ては余は之を論語より學ぶを得ず、大乘經より學ぶを得ず、プラトーの著述より學ぶを得ずして、聖書のみ能く之を余に教ふるなり。聖書は靈魂の救濟に關する最上の教科書にして靈魂學の經書（クラシック）なり。勿論宇宙萬有も神の愛を示さゞるに非ず、基督教外の經典も之を論せざるにあらず、然れども余は世の比較宗教學者に向ひて問はん、バイブルの示すが如き神の



愛を示す經典は他に何處に存するやと。余は生物學を研究せむとする時はダーウィン、ヘッケルに行かむ、哲學を研究せむとする時はヒューム、カントに行かむ、經濟學を研究せむとする時はワグネル、ロッシエルに行かむ、然れども神と神の愛を知らむと欲する時は余は聖書に頼るのみ。故に如何に批評學が進歩するとも、ダニエル書は何人の記事なるかは確定するを得ずとも、約翰傳は使徒約翰の著述にあらずとするとも、使徒保羅の書簡を確定することは難しとするとも、余の聖書に對する尊敬は少しも減少せざるなり。唯余は新説の來る時は十分に其據る所の理由を考究し、新説を歡迎すると共に舊説を尊敬し、進むを知りて守るを忘れざるの武歩を常に取りつゝあるものなり。

斯く余の信仰を表白し來れば、讀者は余の辯解を待たずして余の宗教上の位地を定むることを得るならん。余は無神論者にあらず、ユニテリヤンにあらず、ユニバリサリストに非ず、又深く探究せしならば、長老組合浸禮監督等何れの教會の信徒にもあらざるべし。然れども余はセント、アウガスチン、セント、アンゴロス、セント、アサ子シヲス等の唱へし加特利教には同意する者なり。カルビンの敬神論、ジョン、ウエスレーの博愛神學、アドニラム、ジャドソンの傳道主義、ジエームス、ビー、リッチッード氏の慈悲心は、余の模範とする所なり。然れども若し余は何れの教會に屬せんとを好むやと問ふものあらば、余は答へて曰はむ、基督の萬國教會の支部にして日本國自生の教會に屬せむことを望む」と。斯の如き教會は今あるやなきや、若しあるとせば何處にあるやは、余は今探撿中なれば之を確言するを得ず、唯日夜余の神より受けし道に從ひ、勉めて正道を歩まむと勉めつゝあれば、惠ある神は、何日か余を安然なる余の住家に導き給はむことを信じて疑はざるなり。

（六合雜誌）



## 基督信徒の特徴

特徴なる語は博物學上の語なり、一物を他物より判別する要點を云ふ。爰に鯉魚の特徴あり、即ち左の如し。

有脊椎動物なり、魚類に屬す、硬骨にして軟鰭なり、圓滑鱗を被り、上顎の側縁は中鰐骨より成りて口に齒を有せず、下緦骨は强大にして十個の鈍齒を具ふ、鰾は濶大

にして二囊に分る、口邊に四鬚あり、脣鰭は狹小にして一棘五刺を有す、腹鰭は九刺より成りて脊鰭の初部と相對し、胸鰭は十六刺、尾鰭は二十一刺を有す。

以上を綜稱して鯉魚の特徵と云ふ。宇宙萬有の內此要點を有する者は鯉魚にして他物にあらず、其形の大小を問はず、或は琵琶湖に產せしと稱する長さ一丈八尺の鯉魚も、或は畔の溜水中に游泳する幼稚三分に至らざる鯉魚も、鯉魚は鯉魚にして前記の要點を有す。赤色なるを緋鯉と云ひ、淡黑色なるを眞鯉と云ふ、然れども兩種共に鯉魚にして鮒にあらず、金魚にあらず。之を歐洲の產とせん乎、鯉魚は鯉魚なり、ダニューブの濁水に產するとも、ナイルの聖河に棲息するとも、之を楊子江の溪流に得しも、琵琶湖の淸水鏡の如き中



に獲しも、鯉魚は鯉魚にして同一種なり。或は其外形の不完全異樣なるあるも、前述の特點を有する以上は、鯉魚にして他物にあらず。獨逸產の鏡鯉なる者は體の兩面僅かに四五枚の鱗を有するのみ、然れども同じく是れ鯉魚なり。又獸皮鯉とて全く鱗を有せざるものあり、然れども其體格の組織は其他物ならざるを證す。或は不幸にして一鰭を損するあるも、或は一眼を失ふあるも、吾人は動物學的鑑定に依りて其鯉魚たるを證するを得べし。

鯉魚に類似する魚にして鮒（フナ）あり、而して鯉鮒共に相游泳する時は、孰れを孰れと區別すること甚だ難し。然れども一たび動物學者の手に來れば鯉鮒直に判然するを得るなり。亦鯉魚族の一種にして「ニゴヒ」なるものあり、利根川に產す、其

形狀の「コヒ」に似る甚だ近きが故に斯く稱すれども、其鯉魚にあらざるは明かなり。其外形の類似點の甚だ多きに關せず、其腹內の構造に至りては、鯉魚と全く種族を異にするものなり。是に於てか鯉魚は判然たる一種の動物なるを知るなり。吾人の之を他魚と混ずべきなし、其特徵は現然たり少しく意を注ぎて學理的に之を檢すれば、鮒「ニゴヒ」の如きまがひ物を高尙なる鯉魚の群より全く排除するを得べし。

基督信徒にも亦特徵なきや。「何をかクリスチャンと云ふ」、是れ實際的問題なり。クリスチャンの名濫用せられて今は孰れを孰れと判別し難きに至れり。若し天主敎徒に此名を附すれば、新敎徒は何を以てか稱せん、若しユニテリヤンをして謂はしむれば、獨一無二の神を信ぜざるとも、善



を想ひ義を慕ふものは基督信徒なりと。("Belief in God is dogmate")或る論者は敬天愛民を以て基督信徒の特標となせり。聖書の神託說を主張し「ウエスミンスター」表白を固持する基督信徒と相異なる何ぞ甚だしきや。クリスチャンなる語は、曖昧模糊學術的定義を附する能はざる語なるか。吾人が博物學に於てするが如く、此語の意味に於て一致する事能はざる乎。初代の信徒がアンテオケに於て始めて自ら稱してクリスチャン(χριστιανός)と呼びし時は、如何なる意義を以て此名を附せしや。是れ余輩の知らんと欲して已まざる所なり。

此語の定義に於て吾人が一致せざるが故に、今日の如き敎派の分裂と競爭とはあるなり。クリスチャンにして同一物

ならんか、何故に吾人は兄弟姉妹の和睦と團欒とを維持し能はざるの理あらんや。信徒間の疑察乖離は今日より甚だしきはなし。これ他なし、彼等は同名を以て呼ばるゝも同一物にあらざればなり。吾輩をして若し學理的に歴史的に此語に特別なる意味を附するを得しめば、是れ今日の亂麻を割くの一助たるを信ず。

一「クリスチャン」は人なり。

此命題に關して何人か疑を懐くものあらんや、何人か「クリスチャン」を人以下の動物中に求むるものあらんや。犬の忠なる鷄の順なるは、吾人をして此名稱を彼等に附與するの感を起さしめず。世には禽獸にも劣る人あり、而して吾人は彼が立返りて「クリスチャン」と成ることを思惟し得ると雖



も、忠實なる獵犬が神をアバ(父)よと感せん事は、吾人の思惟の外にあり。「クリスチャン」たり得るは人類の特權にして冀望なり。余輩は未だ「クリスチャン」たり得ざる人類墮落の程度を知らず、人ならん乎、彼は「クリスチャン」たり得るなり。「クリスチャン」は人にして天使ならざるなり。彼の下等動物たらざるを疑はざる人も、彼の行爲を裁判するに當りて、彼を天使と混同するもの多し。「クリスチャン」を以て完全無缺の天使の如きものと見做す人は、未だ「クリスチャン」の何物たるを知らざる人なり。不完全なる人なればこそ「クリスチャン」たり得るなれ、人類的缺點は彼の特徴の一なりと云はざるべからず。曾て罪を犯せし事なき人、曾て自己の缺乏を感せし事なき人、曾て罪戻の矢に心を痛ましめし事なき人、如

何にして如斯人が「クリスチャン」たり得る乎は、余輩が推思せんと欲して能はざる所なり。姦婬罪に身を汚せしマグダラのマリヤなり、義者の迫害を以て國中に鳴り渡りしタルソの保羅なり、變節を以て主を賣らんとせし彼得なり、硬骨の餘り偏僻他人を害ふの術に巧なりし路錫なり、國王に死罪を申渡して後直ちに鷹狩に赴きしコロムウエルなり、是等が基督信徒たりしなり。天使に天使の光榮あらん、「クリスチャン」の光榮は不完全中の完全なり、天に屬する物の形體あり、地に屬する物の形體あり、天に屬する物の榮は地に屬する物の榮に異なり。

二、「クリスチャン」は義人なり。

下等動物にあらず天使族にあらざる「クリスチャン」は、人類



中義人の階級に屬するものなり。世界の人口十五億、之を義人と不義人とに區別し得べし。義人の稱勿論完全なる人の意にあらず。義人とは義を目的とする人を云ふなり。其失態誤謬の中に尚も義を充たさんと勉むるものなり、生涯の大部分を利の爲めに費し、利に牽かるゝと義に牽かるゝよりも強き人は、之を義人の階級に編入する事能はざるなり。此に於てか「クリスチャン」は人間小數の中に含有さるゝものなる事を知るなり。義を最大目的とせざる人の中に「クリスチャン」ありとは、余輩は宇宙が顚倒するとも信ぜざるなり。若し彼にして「クリスチャン」の名を帶びんか、彼は明白なる僞善者なり、彼の雄辯は世界を壓倒し、彼の熱心は(外に現るゝ)滿堂を靡かし、彼は教師牧師監督等の莊嚴なる名稱を以て冠

せらるゝとも、名利を以て動く人は基督信徒にあらざるなり。吾人は彼の教會籍に依りて審かず、吾人は彼の捺印せし信仰箇條に依りて斷せず、吾人は彼の教會的義務を果すの可否に依りて判別せず、吾人は彼の生涯の傾向が名利にあるか義にある乎に依りて決するなり。名利に依るものは不義者の階級に屬す、義に依るものは義者なり、而して基督信徒は義人なり、是れ誤るべきにあらず。

此大區別に重きを置かざるが故に、基督教會に大腐敗を來せし事は枚擧するに遑あらず。世に非倫理的「クリスチャン」なるものゝ存在せんとは信ず可からざる事實なり。若し如斯怪物の有りとせん乎、之を迷信の極と稱せずして何をか稱せん。市場に於ては虚言不實を以て主義とするも、日曜日毎



に教會に出席するが故に基督信徒なり、貧者に物を施さずして之を戸外に追ひ拂ひながら福音傳播に喙を容るゝが故に「クリスチャン」なり、義に勇ならざるも外國宣教師に柔順なるが故に基督信者なり、……咄何等の言ぞ、余輩は天を指して誓はん、余輩は聖書に依りて誓はん、余輩は聖者に抵りて誓はん、彼等は基督信徒にあらざるなり。

世に「倫理的基督教」てふものを唱ふる人あり、余輩は悉く其論旨に服する事能はずと雖も、その今世に必要ありて來りしものなるを知る。「倫理的基督教」を呼び出せし者は「非倫理的基督教信徒」てふ怪物なり。正義善行の外に「クリスチャン」たるの資格ありと信ずるものが世に存在すればなり。純粋倫理が教會内に唱道せらるゝは、常に其墮落の徴候なりと

す。世が預言者を要するの理由、新英洲にシオド、バーカーの起りし理由、英國がトマス、カーライルを喚起せし理由は、共に此倫理的墮落にあり。

基督信徒は義人なり、義を目的とせざるものは「クリスチャン」にあらざるなり。然らば義人は悉く基督信徒なるか、吾人は「義人是れクリスチャンなり」と曰ふを得る乎。

世に義を目的とせざるものにして基督信徒と自稱するものの多きが故に、吾人は屢々義人を總稱して「クリスチャン」と云はんとする念慮を起すなり。義人已に人類中の最少數なり、之をして「クリスチャン」と稱せずして何かを稱せん。基督信徒の名を負うて不義の人たらんよりは、斯名を去りて義者たるに若かず。不義の人に冠するに此光榮ある名稱を以て



するよりは、寧ろ義人を總稱して「クリスチャン」となすに若かず。

然れども余輩は問はんと欲す、義人必ずしも皆基督信徒なる乎と。正義公道を尊びし米のベンジャミン、フランクリンは、彼れ福音的基督敎に甚だ冷淡なりしも「クリスチャン」と稱するを得る乎。自由と公義を愛し常に獨一無二の神を識認して已まざりしトマス、ペーンも、彼が基督敎に對するに當りて常に反抗の位置を取りしに關せず、基督信徒と稱すべきか。マーカス、オーレリヤスの高節仁慈たりしは彼が嚴しく基督信徒を迫害せしに關せず、彼を「クリスチャン」と名付くるに足る乎。若し義人是れ「クリスチャン」なりとの定義をして眞理ならしめんか、我邦の豪傑漢土の聖人、印度の聖者、

波斯、亞拉比亞の勇壯純白の士は、皆悉くクリスチヤンたらざるべからず。是に於てかクリスチヤンの定義は大に解し易きを得るが如し。基督敎會を以て義者の團體となす、何ぞ其宏濶にして寛大なるや。

然れども余輩は此定義に甘んずる能はざるなり、歴史的に攷究するも、科學的に思惟するも、亦心靈的實驗に徴するも、「義人是信徒」なる定義は、辨別を缺くの定義なりと謂はざるを得ず。余輩は是に於て第三の特徴に移る。

三、**基督信徒は義人の一種にして、義を自身の勤勉善行に求めず、神の供へ賜ひし義人耶蘇基督の功績に依りて義とせられん事を望むものなり。**

余輩は必ずしも基督信徒を以て最上の義人なりとは唱へ



ざるべし。然れども彼の普通世に稱する義人たらざるは爭ふべきにあらず。今茲に二種の義人の實例を擧げんに、

近江聖人中江藤樹は云ふ、

吾人德を修むることを思はゞ日々に善をせん而已、一善益す時は一惡損す、日々に善をなさば日々に惡退くべし、是陽長ずる時は陰消するの理なり、久しく怠らずんば善人とならざらんや。

使徒保羅は曰ふ、

善なる者は我すなはち我肉に居らざるを知る、そは願ふ所われに在りとも、善を行ふことを得ざればなり。

我キリストと偕に十字架に釘られたり、もはや既に我生るに非ず、キリスト我に在りて生るなり、今我肉體に在り

て生るは我を愛して我が爲に己を捨てし者、すなはち神の子を信ずるに由りて生るなり。

我は我に力を與ふるキリストに因りて諸の事を爲し得るなり。

兩者其目的物を異にす、前者は純粹道義に向ひて直行せんとし、後者は耶蘇基督を得んと欲す、其義となりて外部に現はるゝに於ては一なるべけれども、其之を行ふの途に於ては判然たる別あり。即ち「義人」は義を己の心中に求め、「クリスチャン」は之を自己以外なる基督に得んとす、己れ義者たらんと欲するにあり、己れの罪人たるを是認し、神の救に與からんと欲するにあり、基督教義人は「赦されたる罪人」たるより他の者にあらず、尚ほ明細に二者の區別を述ぶれば「義人」は



授與者にして「クリスチャン」は受納者「神に對して」なり、前者は仁を盡さんとし、後者は仁「神の」に與からんとす、愛せんとするにあり、愛せられん「神に」とするにあり、直に人を宥すにあり、神に赦されて自ら人を宥すにあり「義人」は云ふ「クリスチャン」の義は利慾的の義にして純粹の義にあらずと、其然らざるは余輩の爰に辯明するを要せず。そは先づ義人たらんと欲する念慮の存せざる人は「クリスチャン」たるを得ざればなり。

二種の義人其義の源を異にするが故に、其善行となりて外面に現はるゝや亦其趣を異にせざるを得ず。

一「義人」の義は貴族的なり。彼は戰うて之を得しが故に之を得ざる者を見るに多少侮慢の念を以てす、罪人を惡むの念

は此種の義人の一特徴なりとす。而して不義の人を鄙しむるの念は、彼等を罪惡社會より乖離せしめ、禪榻を尋ね、清風に臥し、眞と善と美とに就て獨り默想するを以て清淨潔白の生涯なりと信ずるに至る。道義的善人に近づくべからざるの權幕あり。余輩は距離を經て彼を拜せんと欲するも、行きて余輩の弱きを表白し、彼より改悔の敎に與からん事を欲せず、そは彼の詰責を恐るればなり。

グリスチンヤの義は平民的なり。彼は之を己に得ず、故に義に達せざるものを見るに無量の同情推察を以てす、彼自身は「罪人の頭(かしら)」なり、而して何人か彼の與かりし恩惠に與かり得ざるものあらんや、罪人に同情を表するの念(憐むのみにあらず)は「クリスチャン」の一特徴なり。彼は罪人の友なれば



反て義人を去りて罪惡社會に降り、其救濟に從事せんとを欲す、高踏退隱は彼の忌み避くる所、彼は自己の潔白を守らんと欲するよりも、他を汚濁より救はん事を勉む、基督敎的善人に近寄り易きの柔和なるあり。余輩は直に彼に抵り、余輩の弱きを吐露し、改悔の道を彼に授からんと欲す、そは彼の憐憫推察を慕へばなり。

二、道義的善人の善は義務より來る。故に彼の善行は强迫的(coercive)にして苦任なり、彼に機械的常法あり、科學的正式あり、彼の面貌に幾何學的整齊あり、彼の言語に山嶽の動かすべからざるあり。余輩は其大を劇賞すると同時に其廣狹角度を測量的に計算するを得べし、そは彼の巨大なるは單純なる論理的法則の應要より來りしものにして、其中に超自

然的動力を發見し能はざればなり。
クリスチャンの善は愛より來る。故に彼の善行は發情的にして快樂なり、彼に生物的自動性あり、彼の言語に秩序を缺く事多し、(保羅の書翰、コロムウエルの演説集を參考せよ)、彼の行爲に往々小兒的氣儘なるあり、野草の昵み易きあり、余輩其美を讃賞するには非ざるべけれども、其形其香は科學的に定量すべきにあらず。そは彼の特美は已定の常式に依りて造られしものにあらず、其何處より來り何處へ往くかを知らざれば、之を超自然的源因に歸するより他に解析の求むべきなければなり。
三、修業的義人には冷熱の變動甚だ尠し。彼の心中に道義的一模範の存するあれば、彼は彼の感情行爲の其範圍を脫せ



ざらん事を勉む。王陽明陣營に在りて戰捷を聞き、徐かに聖學を講ず。
　澄在臚鴻寺倉居、忽家信至、言兒病危、澄心甚憂悶不能堪、先生〔陽明〕曰、此時正宜用功、若此時放過、閑時講學何用、人正要在此等時磨鍊云云、
靜寂は彼の欲する所、喜怒哀樂は彼の鄙みて遠ざくる所也。」クリスチャンは感情的たるを免かれず、悲哀の極彼は Les Miserables を吟じ、歡喜の極彼は「Te Deum」を謳ふ、北軍をダムバーの郊野に破りて民軍の將讃歌をたゝへ、嬰兒を喪うて英雄の心腸まさに張り烈けんとす、神靈心を充たして歡喜喩ふるに物なく、疑雲天を覆うて叫號明を望みて已まず、「クリスチャン」の感情は壓抑せらるゝにあらずして益々銳きを

加ふ、彼の達せんと欲する所は静寂にあらずして永遠の歡喜なり、涙は彼の貴重なる所有品なり、之を憂愁の爲めに注がざるに至れば歡喜の爲めに流さんとす。

四工夫的義人は心の欠乏を知りて之を掩はんと欲し、軟弱を見て怯なりとなし、已に叱咤して之を退けんと欲す、彼の勇氣あるは耐忍と皷舞との結果にして、歡喜と快樂との其内にある少し。

クリスチャンは自己の欠點を認めて之を掩はん事を勉めず、弱きは彼の特性なれば、彼は弱くして强からん事を求む、彼の勇氣は心中に湧き來る言ふべからざる歡喜と感謝の結果にして、苦痛が彼の神經を無感覺ならしめざる以上は、彼は常に希望を懷きて躍々然たり。



以上はクリスチャンの特徴五六に過ぎず、之を明細に記載せん事は本誌餘白の許さゞる所なり。然れども余輩の茲に摘示せし所に依りてクリスチャンを他の人類より區別し得る事と信ずるなり。今短縮して之を記さんに、

クリスチャンは肉情を帶びたる人間なり、彼は義を慕ふ者にして、義を以て生涯の目的とする渾ての人々と共に義人の階級を造る。彼は其義をナザレの耶蘇基督の功績に求むるものなるを以て、自己の缺點と軟弱と罪惡とを識認す(以上を大特徴 Main characteristics と稱す)。故に彼は惡を惡むと同時に惡人に同情推察を表す。彼に善行あれば是れ彼の自然性にして倫理的法則の强迫に依りて出るに非ず。彼の感情は鋭敏なり、彼は涙を流す事を以て恥と

なさず。彼の擧動に小兒的自然なるありて、羸弱の中に抗す可からざるの勇氣あり（以上を小特徴 Minor characteristics と稱すべし）。

基督教徒の完全なる人ならざるは余輩の已に論述せし所なり、彼亦必ずしも倫理的義人に優らず、恰も鮒の大にして完全なるは鯉の小にして殘害せられしものに優るが如し。然れども鯉は鯉にして鮒は鮒なり、二者に構造的の別ありて、一物は他物と混同し得べきにあらず。孔子の大なるも彼に倫理學的機械式あり、彼得の微弱なるも彼に基督教的の自然なるあり、前者は技術（Art）にして後者は生命なり、前者を埃及の三角塔なりとせば、後者は山野を走る小山羊なり、三角塔大ならざるにあらず、山羊必ずしも大價値あるにあ



らず、然れども兩者の別は殆ど死と生との別なり。

以上の特徴を有するものは即ち基督信徒なり。彼の國籍、國民、人種の如何に關せず、彼の皮膚は白なりとも黄なりとも黒なりとも、大と小との別なく、穆と顯との別に關せず、キリスト家の家族には一種異樣の風ありて、彼等は兄弟たり、姉妹たり、同一血の彼等の心靈に流るゝありて、彼等は相互を識認し得べく、彼等は自ら世と別物なるを知るなり。然れども鯉池に鮒の棲息するが如く、基督教會内多くの似而非なるクリスチャンあり。其外貌の相似たるより、一目して之を判別し能はざる事多し。而して大鯉は小鯉に勝りて市場に賣價を有するが故に、世は時には鮒を稱して鯉に優れりとなす事あり。然れども余輩養魚家は知る、鮒を鯉池に飼育す

るは常に鯉種を下落せしむるものなる事を。其鯉鮒相混合して子を生むや、之を Crucian Carp と稱し、鯉にも及ばず鮒にも劣る不用魚なるを、而して鮒にも劣るものは似鯉(Barbus)なり、其形の鯉に類似するは鮒の及ぶ所にあらず、魚類學者にあらざる以上は反て之を鯉の親戚と見做し、鮒にも勝るものとせん、然れども似鯉は惡魚なり、其肉は特種の臭氣を帶びて喰ふに堪へず、「非倫理的クリスチャン」は似鯉なり、彼をして池中に存せしむる勿れ。

此實際的世界に在りては、此麥と稗子(からすむぎ)と、羊と山羊と、全く相分つの難き社會に於ては、鮒の一尾をも存せざる鯉池は望むべからず、クリスチャンのみの教會も又然らん。然れども余輩は麥畑を變じて稗子畑となすべからず、鯉池をして鮒



魚の押領する所たらしむべからず。基督教會はクリスチャンの棲息所なり、其勢力はクリスチャンの掌中に存せざるべからず、「非倫理的信徒」勿論一日も其内に潜むの權利を有せず、「倫理的信徒」なるものも、若し、其翅翼(つばさ)の下に棲息せんと欲せば、彼は默して靜なるべきのみ、そは彼は客にして主にあらず、鮒にして鯉にあらざればなり。

(六合雜誌)

## 永生の冀望

孔子曰く「我未だ生を知らず焉んぞ死を知らん」と。基督曰く「明日の事を憂ひ慮ふなかれ、明日は明日の事を思ひわづらへ、一日の苦勞は一日にて足れり」と。フランクリン曰く「一つの今日は二つの明日に勝りて價値あり」と。フヰリップ、ベイ

レー曰く「吾人の歳月は功業の多寡を以て算すべし、年數を以てすべからず、……最も高く感せし人、最も多く働らきし人が最も永く生きし人なり」と。

人の生涯は今日にありて將來にあらず、未來に着念して現世を怠る人は、縱令未來あるにもせよ、未來を承續ぐべき人にあらず。義務は吾人の指南車なり、縱令地獄の底に抵るも義務の指命は我れ逆はじ。善の善たると義の義たるとは、未來の存すると存せざるとに些少の關係を有せず、死後の快樂の爲に今世に於て勞するは、老後の快樂の爲に其子を教育すると等しく、利己的現金的の精神なり。義の爲めにせんか、靈魂全滅に歸するも可なり、神も未來をも失ふも可なり、粉身碎骨此國と此民とに盡さんとするに當りて。吾人に寸



毫の私心あるべからず。天國と謂ひ、極樂と謂ひ、是れ吾人が死して利慾の羈絆より脱せし時の狀にあらずや。生命を保全せんとする者は之を失ひ、義の爲めに之を失ふものは之を得べし。後世の娛樂に與からんと欲するものは、即ち後生を失ふものなり。先づ捐つるにあらざれば得べからず、此生然り、永生亦然らむ。

據りて知る純粹倫理に未來觀念の必要なきを。未來を知るの要は、吾人の勇行を勵ますにあり、吾人の思惟を高むるにあり、吾人の澁苦を慰むるにあり。

宗教は審美的倫理なり、單に勇なるのみならず高尚に勇ならしむ、單に忍ぶのみならず喜ばしく思はしむ、未來觀念は大美術家の手に作りし繪畫樂譜の如きものゝ之を生活の必

要品と稱すべからざるも、之を有して吾人の態度に温雅なるあり、吾人の行爲に優麗なるあり、吾人の思惟に美麗なるあり、否之に止まらずして美術は勇より勇を生み、壯をして益々壯ならしむ。マーセーユの樂譜始めて佛の南方に響きて、全佛擧て革命の民となれり、國歌陣頭に奏せられて、ウォータローの戰塲は英軍の有に歸せり。路錫曰へるあり「余の笛聲響き渡りて惡魔去りて跡を留めず」と。敵を殪すは銃にあり、勇を皷するは樂にあり、美術亦重要なる交戰具なり。

吾人に尚は來るべき理想的生涯ありと假想せよ。完全無缺の社會、吾人の聖望を盡く充たさるべき處、私慾の痕跡だも留めざる處、水の大洋を淹ふが如く正義の盈ち滿ち渡る處、淚の悉く乾く處、哀み哭き痛みあることなき處、生命の水の



流るゝ處、生命の樹の實る處、凡て潔からざる者、凡て憎むべきもの、凡て不義なるもの、凡て誣をいふ者の入ることを得ざる處、即ち詩人ゲーテの言ひし「歡、此に滿ち、望此に成る處」……如斯……世界の猶は今世の後に在るありて、吾人は之に入るの特權を有し、亦之に入るの途の吾人に供へられしと假想せよ。斯くの如きの感念が、如何に吾人の思想を高尚美嚴ならしめ、死を輕んぜしめ、義を重んぜしめ、善を爲すに敏ならしめ、惡を避くるに捷ならしめ、淚を拭はしめ、愁苦を散ぜしむる乎は、余輩の言を待たずして明かなり。宜なる哉アイザック、ワットの言や、

若し天上の名簿の錄に
たしかに我名を記するを讀まば

我は慴怖に別を告げて
我は流るゝ涙を拭はん

然り人類に供せられし奬勵慰藉の內に未來存在の應承の如きはあらじ。若し之を詩人の夢想に成りしものとするも、其人世を益せしこと實に大なり。

然れども、來世問題は其實利を離れて攷究するを要す。これを勸善懲惡の用に供し、善を勵ますに其賞を以てし、惡を誡しむるに其罰を以てするが故に、未來感念は愚者凡夫の畏懼信頼する所となり、義人傑士の輕慢放棄する所となるなり。余輩はこれを宇宙の眞理として探究するを要す、善惡自然の結果として攷察するを要す。余輩は自身其賞に與からんが爲めに其存在を確めんと欲するにあらずして、余輩に



勝る正義の士にして、今世に於て彼等の受くべき應報に與からざりし者の未來の有樣を知らんと欲するなり。即ち此世の事實は、以て天道是乎非乎の大問題を決するに足らざるが故に、余輩は神の義を建てんが爲めに造化の隱語を解せんが爲めに、今世以外に生靈の存在を索むるものなり、而して余輩の探究の結果として、之を人世の冀望に徵して、之を偉人の證言に照して、之を自然の働作に問うて、之を造主の本性に質して、之を吾人の自覺に證して、生は現世に止まらずして今世以後尙ほ來世あるを解り、吾人の稱して死となすものは、死滅の謂にあらずして單に變世なるを知らば、吾人の此世に處するに當りて、吾人の厄を忍ぶに際して、吾人に大影響を來すは、理の最も瞭易きものなり。

未來永生の冀望は實に現世の不調より發するなり、これ佞姦の士が忠臣義士視さるゝの世なり、これ高節の士が迫害窘逐さるゝ世なり、壯士百年の計圖を懷きて死し、衰老死を望みて至らず。節婦薄命にして奸人壽を以て終る、時に媚びて成り、世に抗して敗る。志士は身を殺して仁を爲し、懦夫は命を存して仁に與かる。播くものは刈るものにあらず、賞罰褒貶の配布不公平たる現世の如きはあらじ。「天道不知是歟非、陰雲漠々日光微」「世上毀譽輕似塵、人間百事僞乎眞」「木戸松菊は斯く歎せり、西郷南洲は斯く疑へり。靜思人世を考ふるものにして何人か此感なからざらんや。

天道は是なり、非なる能はず、然れども現世は非なり、吾人の懷疑は現世の是ならざるが故にして天道の非なるに因らず。是に於て未來感念の哲學的必要は起る也。現世は吾人存在の一部分として解するを得べし、其全部として解する能はず。吾人の未來を知らんとするは、吾人の思惟に責められてなり。



未來存せざれば可し、吾人は憂を吞んで忍ばん、然れども實に存せん乎、吾人の之を知らんと欲する切なり。斷腸の思ひを以て永遠の訣別を告げし吾人の愛するものは、今猶は存する乎。義者義の爲めに死して義の冠を頂く處ある乎。鬱勃として吾人の胸中に湧き來る聖思聖想の行はるべき處あるか。佞人の棲息し得ざる世界あるか。人世の冀望實に之より大なるはなし。

然れども吾人は實驗的に其存在を確かむる能はず、吾人推(インフェ)

度的（レンシャル）にのみ之を知るを得るなり。余輩は巨人に抵りて問はん、余輩は自然の指示を受けけん、余輩は神の本性に質さん、余輩は余輩の自覺に問はん、吾人は死して死せざる乎、永生の冀望は賴むべき乎と。　（福音新報）

## 露國美術家ニコライ、ガイ

Nicolai Nicolaievith Gay.

彼は一千八百二十九年露國ホロチスクに生る。幼にして祖母某の懇切なる敎訓に與かり、神を恐れ隣人を愛するの念を注入されたり。夙くより美術的傾向を顯はし、未だ小學生徒たりし時、已にある劇場の裝飾を委托せられしことありと云ふ。後キーフ聖彼得堡の大學に入り數學を究めんと欲



せしかども、終に彼の自然の意向に徇ひ專ら美術を修むる事に決せり。聖彼得堡美術學校に入り、七年間全く彼の意を繪畫の術に込めたり。彼の絶世の天才は、衆人の認むる所となり、該校評議員會議の推薦に依り、官費を以て伊太利國留學を命せられたり。

祖母の注入せし宗敎心は、大學に入りてより佛國懷疑思想の爲めに破壞する所となり、彼の故國を去らんとする頃は、彼は殆んど無神論者の位置に立てり。時に露國に於ては革新思想頓に勃興し、已に其弊害を呈するに至りたれば、彼は舊を賤むと同時に、亦新に對して全く信仰を失ひ、彼の心靈は慘憺たる暗夜に彷徨し、彼は全く確信の堅岩より離れたりき。

斯くて彼は美術家の樂園なる伊太利に至りぬ。美術の原動力たる宗敎彼の心中より失せて、彼は他に彼に理想を呈すべき主義を求めんと苦心せり。彼は無宗敎となりしと雖も、正義公道を愛するの念は彼より脱却せず。故に彼は自然と昔時羅馬時代の「ストア」主義に傾けり。而して彼の美術も、其理想を現出せん事を勉め、「ピルジニャの死」なる一額面を畫かんとせり。

然れども憂欝を以て壓せられたる彼の思惟は、彼に神來的技工を許さず、彼は彼の心靈に大刺戟を求めざる可からず、然らざれば彼の美術的手腕は、將に萎靡せんとす。一日憂欝其極に達して、彼は美術を放棄せんと思へり。彼はフハウストの例を學び毒藥一杯を以て冀望なき彼の生命に訣別を



告げんとせり。

時に彼の目は彼の座側に横はりし新約聖書一冊に觸れたり、彼は愁悶の餘り手を伸ばして之を取上げたり、彼は目的なしに之を開けり、而して彼の拇指の接せし所は、約翰傳第十三章基督聖餐の章なりき。彼は覺えず一たび之を通讀せり、……嗚呼如何なる記事ぞ、其主人公……彼の愛、彼の慈、彼の優、彼の忍……弟子約翰の信、彼得(ペテロ)の勇、ユダの虐……人生の最大幸福は克己獻身にあり……基督……人類の模範は彼なり、基督……人類の傚ふべきは彼なり……理想的の人……神の子……神……嗚呼我の畫筆は何處にある、畫地よ、色料よ、此神來の想像、我之を彩色を以て現はさゞる可からずと。

彼は直に畫筆を取れり、彼は畫地に對ひて坐せり、彼の想像の活劇なる彼をして先づ下圖を作るの必要あらざらしめたり。ミケル、アンジエローが、鑿を以て直に大理石に向ひ有名なる摩西の像を彫みしが如く、ガイは彩色を以て直に彼の畫地に臨めり。如斯にして刻苦六箇月にして、彼の理想は畫面に現はれたり。憂鬱の魔鬼は已に去りて跡を留めず、而して露國畫師の傑作中の一に算へらるゝガイの「聖餐」なる一面は世に出でたり、未だ全く完結せざりし彼の懷疑時代の作は、彼は直に破棄したり、彼は基督信徒に復せり、彼は美術を放棄せざる可し。

幾くもなくして彼は伊國を去り、聖彼得堡に歸れり。恰もよし露國繪畫競進會の機に會したれば、彼は彼の「聖餐」を出品



せり、萬人は異口同音に之を賞讃して止まざりき。彼も亦眞正の一美術を世に呈せしの滿足を感ぜり、彼の伎倆は歐洲に鳴渡りぬ。彼の政府は永久の賞與を以て彼を賞せんとせり、帝國美術學校教授の位置は彼に與へられぬ。然れども彼は官吏社會の束縛を厭ひたり、彼は曰へり「美術の發達は自由を要す」と。美術學校副教頭ガガリン公は彼に曰へり「我校の教授は睡眠しつゝあり……」公未だ語を終らざるにガイは笑ひて曰く「殿下は余を其仲間に引入れて鼾雷の聲を益々高からしめんとするか」と、終に榮譽の椅子を辭し、直に再び伊太利に赴けり。

今や宗教畫は彼の專門となれり「復活の告知者」なる畫は彼の第二の作なりき。然れども其實に迫る餘り甚だしきと、其

趣向の時の「オルソドックス」派の思惟と全く反對なりしは、「聖餐」に於けるが如き賞讃を彼に與へざりき。露國政府は此畫の公衆に示さるゝを許さず、彼は今は異端的畫師として見做さるゝに至れり。

彼は大膽にも美術學校敎授の椅子を辭せり、彼は榮譽と安樂とを棄てゝ貧と自由とを擇べり。然れども實際的貧苦は彼の詩人的想像に依りしが如き愉快なるものにあらず、貧は今は饑餓となり、工室の欠乏となり、日常品の不足となりて彼に迫り來れり。然れども彼は勇ましく之に堪へたり、彼は今や貧の功用を知り始めたり、即ち貧は滿足に至るの捷徑なることを、再び基督の模範的生涯は、彼の心中に浮び出ぬ。神來的理想畫は彼の胸中に畫かれ始めぬ。



貧に迫まりて彼はゲスセマネの園に於ける基督を想ひ出せり、而して是れ彼の第三の大作の題となりぬ。彼は靈に充たされつゝ此畫を終れり。然れども彼一日徐かに之を檢するに、彼の作の彼の理想に及ばざるを發見せり。彼は寸刻も此不完全なる基督に堪ふる能はず、依りて直に數ヶ月の勞力に成れる第一作を破毀せり、而して直に第二の作に取掛かれり。第二作は成れり、之を見し人は皆秀作として之を賞讃せり、畫師彼自身も稍々滿足の體に見えたり。然れども尙ほ熟思之を眺め見るに欠點一にして足らず、彼は理想に叶はざる基督を後世に傳ふるに忍びず、終に第二作をも亦之を破毀せり。第三作は成れり、基督は頭を擡げ、今や祈禱より起たんとす。月光薄く橄欖樹の枝葉を透して、彼の右面にかゝ

りぬ。畫師の理想は始めて實成されぬ。彼は此畫を倫敦萬國博覽會に出品せり。ガイの名今は世界に高く、名譽と賞嘆とは、今は彼の身に蒐まれり。

異鄕に在ること十三年にして彼は故國に歸れり、時に露國の社會は革新進步の冀望を以て浮かれつゝありし。ガイは直に此氣運に乘じたり、是れ彼の社交的時代なりき。彼と彼の黨派とは、露國に於て自由の新天地を造り出さん事を夢想せり。嚴格なる出版條例は緩められぬ、信仰の自由は與へられんとせり。國民は言へり「自由は彼得大帝建國の大精神なり」と。大帝は實に進步黨の崇拜物となれり。ガイの畫筆今は國民の理想的英雄を畫き出さんとせり。而して此時に成りし彼の傑作は「彼得大帝と其子アレッキス」なる一面なり



き。此畫出て露國全體は感激せられたり。此畫を一見せざるは露國人の恥辱たるに至れり。時の皇帝アレキサンドル第二世、大金を投じて之を購はんとせり。然れども已にモスコー府の豪家某の買收する所となり、終に皇子ウラヂミヤ大公を遣はし、直にガイに就きて副對を依賴するに至れり。ガイの勢力今や政治界に及び、彼は進步黨の巨魁と見倣さるゝに至れり。

彼の成功は彼をして國民的人物を、悉く彼の畫筆に載せんとするの冀望を彼に起さしめたり。彼はカテリン女帝の像を以て彼得大帝の畫に次げり、而して是又好評を博して止まざりき。殊に光線の配布に至りては、彼の畫作中他に之に優るものなしと云ふ。然れども彼は此時に當りて進步黨の

冀望は、露國北方三月の花の如く一時の狂花たりしを悟れり、保守の寒風は再び吹き歸り、舊時の壓制露士亞とは成りぬ。此に至りてガイの慧眼は抵抗の無益なるを見たり。然れども社會を辭する前に一箇の諷刺書を遺さゞるを得ず。故に彼は詩人プーシュキン禁錮の狀を書き、盲目政府が高潔の士を虐待するの狀を寫し、之を社會への暇乞となし、南方露士亞の一僻村に田畑僅少を購ひ、此處に永住の居を定めたり。彼は彼の社交的時代を稱して彼の偶像時代と言へり。そは彼の神聖なる畫筆をば混濁たる世事の爲めに弄せしを悔いてなり。

彼の田畝に退隱せんとするに先ち、彼は再び伊國に赴き、平和なる一生を美術と共に送らんと思ひたり。然れども熟々



思ふに彼は壓制の下に困しめる彼の國人を後にして、安逸を他國に求むるに忍びず、縱令威力を以て彼の政府に抗し得ざるも、彼は彼の壓せらるゝ國民と運命を共にし、純白なる生涯を以て殘忍政府の下に忍ばんと決心せり。彼の僻陬に退隱するや再び貧の彼に給すべきなし、貧困再び彼と彼の家族の身に迫り來り、彼をして一層下民推察の念に富ましめ、彼の天職の何處に存するかを感せしめたり。時こそ宜けれ、渠の帝國美術學校は再び招待狀を彼に向ひて發せり、彼の政府は思へり、貧困は彼をして先年の彼の決心を變せしめ、首府に於ける美術の泰斗たるを肯せしむるに至らんと。之を受納するの誘惑は殊に強かりき。然れどもガイは再び之に勝てり、彼は云へり「安逸は何れの位置に於てするも

溢滯なり動かずして進歩と生命のあるなし」と。彼は生命を求むるが故に、貧を擇べり、彼は貧を彼の姉妹と呼べり、彼は彼の一子と共に耕耘に從事し、正直なる勞働より來る麁食に依り、彼の清淨なる良心を養ふを以て最上の快とせり。

退隱後彼の最始の書作は「慈悲」と題せし一面なりき。即ち馬太傳廿五章四十五節「爾曹わが此兄弟の最微者の一人に行へるは即ち我に行ひしなり」との意を書きしものなり。一貴婦人一手に銀杓を取り、乞兒の體をなせる一貧者に一杯の冷水を惠みし狀にして、被施者の面想自ら書師の理想的基督の貌あり、此書を聖彼得堡に展示し、暗に貴族社會の無情を責め、基督敎の眞意を辯せり。

ガイ一日莫斯格府の某新聞を手にせり、内に貧者の慘狀を



記する一論文ありたり、其結論に曰く、

貧者を惠まんと欲するものは、彼等の最も要する同情推察の心を彼等に給せざるべからず、冷水一杯又は貨幣の一片を彼等に投ずるは、吾人の彼等に對する完全なる義務にあらず、又其肝要なる部分と稱すべからず。吾人は進みて彼等の社會に入り、愛心を以て深く彼等の狀態を研究し、吾人同等のものとして、吾人の兄弟として、彼等を取扱ふべきなり。

ガイ一讀して世に彼と理想と目的とを共にする人あるを知り、欣喜禁ずる能はず、該論文の記者に會し、彼に謝し、彼と後來を計らんとするの念を起せり。此記者とは何人ぞ。露國貴族社會に卓立し、奮然身を下民と伍し、實行的基督敎を以

て自ら任ずる有名なるトルストイ伯なりき。而して、ガイの誠實なる此論文を讀みて、彼の前作「慈悲」の一面に堪ふる能はず。後世に痴情的慈善事業を敎へんことを恐れ、彼の常例に從ひ、此美術上大價値ある畵面を破毀し、而る後に旅程に上れり。

彼は莫斯格府に至り、直にトルストイ伯をその居寓に訪へり、待つこと一日にして主人に會す、ガイ曰く、

余は畵工なり、南方より來るもの、閣下は余と主(基督を指す)を共にするものなり、然れども余の閣下に及ばざる數歩、閣下余に命せよ、余は何事たりとも閣下の指揮に從はん。

曾て一面識なき兩雄相會して竹馬の友の如し。靈、靈と交はり、心、心と合し、二人相談じて時の移るを忘る。ガイ後日人に



語りて曰く「余は彼時に始めて生涯の眞意、美術の淵源、眞善の理想の何たるかを知れり。美術的新期限は、此會合に依りて余に開かれたり」と。

ガイは彼の田野に歸れり、而して新感動に躍る彼の理想を畵き始めぬ。彼は先づ幼年の基督が、聖殿に於て、學者輩と相語るの一面に着手せり。彼の意蓋し陳腐神學者が神來の聖賢に接する時の樣を寫さんとせしにあらん。然れども暫時にして之を廢し、彼の特愛の畵題なる「聖餐」に轉せり。今回は前作と異なり、基督が約翰彼得の兩忠僕を率ひ、聖餐の席を去りて門外に出でし時の狀を寫せり。基督の面貌に來らんとする苦痛の顯然と刻せるあり、約翰に師の安全を氣遣ふ配慮あり、彼得に彼の自信の勇氣に賴り、凜然として前に進む

の狀あり、美術專門家は云ふ、ガイの作にして、此等三人物の眞相を畫きしものは、此一面に優るものなしと。然れどもガイの最傑作は此後に出たり、即ち「ピラトの前の基督」なる一面なり。

ガイの理想的基督は古代の畫工の想像に成りしが如き柔和温雅、身より五光を發し、頭上に圓光を戴く奇跡的人物にあらず。ガイの基督は純然たる一平民なり。彼は基督の神性を現はすに神人的外裝を要せず、中形の一男子、身に常人の麁服を纏ひ、頭髮亂れ、鬚剃らず、預言者以賽亞の言へる「我儕が見るべきうるはしき容なく、うつくしき貌なく、我儕が慕ふべき艶色なし」との狀なり。唯見る瘦衰の面貌に一對の眼光炯々として、法官ピラトを射るの狀は、吾人をして此の異



體の藏する靈は人以上の靈たるを認めしむ。心靈的の基督に對し世俗的のピラトは、肥滿の一偉漢、官衣を服し、右手を伸べ、冷笑を唇邊に呈し、基督に向ひ「眞理は如何なる者ぞ」との嘲弄を吐きて將に去らんとするの狀は實に眞に迫り、世間に有り餘る程存在する世俗才子の顔面を穿ちて餘りあり。

此畫聖彼得堡に出て萬人先を爭うて之を觀たり。畫師の伎倆は爭ふ可きにあらず。然れども彼の理想と趣向とに關しては世評區々たり。オルソドックス派の僧侶は云へり、是れ聖人物を凡化せしものにて、其畫師たるものは、永遠の刑罰に附せざるべきものなりと。然れどもガイの辯護せんとする被害正義の戰は、流涕畫に對して感激禁ずる能はず、無量の

慰籍に與かりしもの擧げて算ふ可からずと云ふ。露國政府は、終に干渉せざるを得ざるに至れり。ガイの作をして美術館外に撤せしめ、公衆の展覽を禁止し、且つ其寫眞だも販賣するを許さゞるに至れり。

露國より放逐せられて此畵獨逸諸邦に展示され、到る處賞賛喝采を得ざるはなし。其漢堡（ハムボルク）に至るや、勞働者は群をなして之を觀覽し、其將に他市に轉ぜられんとするや、無資の勞働者等、金四千ルーブルを醵して、これをガイに贈り、再び漢堡に此畵を持歸らん事を乞へり。以て其下民に與へし感覺の偉大なりしを知るべし。

ガイをして斯く下層衆民を感動せしめしの理由は得て探り難きにあらず。彼の思考に依れば、人は神靈の宿る聖殿に



して、何人も彼の心に眞善を藏するあり、而して美術は此眞善を現はすものなれば、神靈を藏する人にして何人も美術を味ひ得ざるものなしと。故に美術を以て美術家の特有物と見做し、美術的階級を作り、美術的秘密を守るが如きは、ガイの擯斥して止まざる所なり。彼は亦曰く「美術も政治宗教經濟と均しく、人世の幸福進歩の爲めに使用すべきものなり、美術は美術の爲めに耕すべからず、美は眞と善とより離縁すべからざるものなり」と。故に彼の畵筆を採るや、傳道師が說教壇に上る時の心得を以てし、同胞を益するを以て彼の着眼とせり。彼は嘗て曰へり、

余の精神を込めて畵作に從事する時と雖も、若し乞食ありてその痛傷を包まんことを余に乞ふものあらん乎、又

は盲人ありて余に隣村迄の案内を托することあらん乎、余は直に余の書筆を投じ、余の全身全力を盡して余の同胞の求めに應ぜざる可からず

と、剴切なる推察の情は彼の特質なり。如何程零落せしものと雖も人は人にして彼の眼には神聖なり。彼の美術的伎倆は全く救世の用に供し、彼も又彼の天職の此に在るを信じ、彼の全身を此一事に消費せり。

彼は今猶は南方露士亞僻陬の地に住し、衣食の料を彼の兩手の勞働に得、彼の頭髮今や白霜を頂くと雖も、彼の壯時の理想は彼を去らず、新約聖書一冊は常に彼の身を離るゝ事なく、清き良心と萬人に對する愛とを以て彼の老年を慰藉し、農聖人の生を以て彼の生となしつゝあり。空名財貨に汲



々たる近世の士は、彼に就きて大に學ぶ所ありて可なり。

（國民之友）

## 文學局外觀（口述）

私の思ひまするに、今の日本の文學は悲觀的（ペシミスチック）といふより外はないやうです。日本人は近頃になつてだん〳〵其の高貴（ノーブル）な精神を失ふと共に、文學も高貴な所を失つたやうに思ひます、また今日の情弱なる社會を來たしたのは、文學亦與かりて力ありと思ひます。

如何なる國の文學でも、文學には常に二ッの元素があります。その一ッは沈痛（サッドネス）といふことです。此の沈痛といふものなくては、文學も美術も、また音樂も「美」といふものを失ひます、大なる文學は皆その一面には沈痛を現はして居ます。例之、

天使の繪を見れば、その顏や眼に言ふに言ばれぬ無限の沈痛を帶びて居ます、古の英傑の肖像を見ても、その眼や顏に沈痛の色を含みて居ます、クロンウエルでも、ルーテルでも、ワシントンの顏でさへ、その眼中に無限の沈痛があります、私共は釋迦や基督の顏を見ることを得ませんが、その顏には、常に愁を帶びて居つたことは疑ないと思ひます。

勿論此の沈痛は、己れを悲む故のみではありません、人類の悲、世間の悲、此の世の悲を一身に受けて居ますから、悲まざるを得ないのです。總じて此の悲觀に伴ふものは「悲憤」「慷慨」即ち義怒(インヂグネーション)です、或時はこれが憎惡(ヘートレッド)となります、強度の情緒(インテンスフイーリング)は常にこの悲觀に伴ふ感情です。私の思ひますのに、佛敎の最も美なる點は、釋迦が人世の悲慘を述べた所にあると思ひ



ます、誰れでしたか佛敎を評して高貴(ノーブル)なる沈痛(サッドネス)だといひました、斯かる沈痛は文學にもあるのです。

第二の要素は、悲觀に伴ふ歡喜です、希望です。人生悲慘の極に達して尙ほ之れに勝てる人、此の人が人生を敎化し、人生の秘密を語ることの出來る人なんです、悽愴慘憺の中に歡喜の讃美歌を歌ふ人です、此の人が眞正の歡樂を解する人です。肉體上の快樂、社交上の快樂などは、此の歡喜に比ぶれば實につまらないものです。それですから古の英雄の顏には悲觀あるやうに、勝利の光榮(トライアンフアンドグロリー)ともいふべき喜があります。これが喜の悲で悲の喜です。

それですから世界の大文學の要素は、畢竟此の二ッに盡きて居るのです、最も小なるものでいへば、あのハンデルとい

ふ人の作つた『メサイヤ』といふ譜があります。其譜は哀痛に始まりて歡喜の極で終りて居ます。之を大にしていへばダンテの『神曲』、地獄の部分、三十四章の地獄の場は悲慘沈痛の悲劇です。之を讀む時は、私のやうに神經の强い者は恐くて、悽くて、夜も眠らないことが度々あります。地獄の部分を讀むうちは、もうこれで此の悲慘の極から救ひ出だされなければ、奈何なるかと恐ろしくなります、併し段々讀んで煉獄(パルゲトリオ)の終りに至り、それから段々天國に近づく時は、暗憺たる夜は終りて東白の微光を見る心地がします、それから終りの天國(パラデシオ)に至れば、實に大困難を過ぎて喜の來るが如き感じがします、前の苦痛は十分に拭はれて了ひます。ダンテに就いては色々の評もありますが、その中最も好い所は此の對照(コントラスト)



の點にあります。非常なる光明と非常なる暗黑と、悲觀と喜觀とよく對照したる所にあります。單に此の點から評すれば、『神曲』のやうな作は、再び此の世に出ますまい、此の明暗二點をよく描出したところは、彼れの美術的天才ばかりでない、細密といふ點に於ては彼れよりエライ人は多くあります、併し讀者に悲喜を兩方よく感せしむるところ、是れダンテのダンテたるところです。

此の同一の立脚點からゲーテの『ファウスト』、レッシングの『ナタン、デル、ワイゼ』などを評することが出來やうと思ひます。沙翁の『ロミヨー、エンド、ジュリエー』或はレッシングの『エミリヤ、ガロチ』の如き者は、悲慘を以て始まり、悲慘を以て終りて居ります、これを稱して悲劇といひます。現にレ

ッシングは、此點から攻擊され、poetic justice がないといはれますが、併し彼自身も、彼れのよき批評家も評して此の悲劇中にも無限の justice があることを認めて居ます。此の事はレッシング自身の人生觀から照して見ても明かです。

それですから悲慘なくして歡喜なく、歡喜なくして悲慘はありません、一は他の前提です、非常の喜を解する人は非常の悲慘を描き得る人で、非常な喜のない人は非常な悲曲を歌ふことは出來ない人です。若しある著者がありまして、悲慘を描く時に、皮相の悲を描きますならば、その人は喜をも知らない人です。ヴヰクトル、ユーゴーのやうな人は、どうしてあんな悲慘慘酷なことを書けたかといふに、日本人が言ふやうにたゞ不平がありしばかりではなく、一方にはよく不



平に勝ち得たからです。又現今歐米にはやされるイブセンの如きは、實に不平タラ〳〵の人のやうに見ゑます、彼の大不平に比ぶれば、我が國人の不平などは五十分の一もありません。私の書いた物を世人はよく不平文字だといひますが、彼れに較ぶれば、さうですね、何に譬へませうか、茶と純粹のビットルとを較べたやうなものでせう、一寸ばかりイブセンの作を讀んだ人は皆さう感じます。併し彼れが不平家ばかりで、不平を吐くことばかりで、此の大不平を慰めるものがなかつたならば、滿足といふ者のない人ならば、既に不平の爲に憤死すべき人でせう、然るに斯く不平を吐きながら堪へることを得たのは、人の知らない喜が彼の裡にあるからです、

それで、日本の今日の文學に歸れば、その大缺點のあるところは直ぐに見えるのです。私は今日の日本人には確固とした人生觀がないと斷言することを憚りません、日本人の最大多數は人生を常談のやうに思つて居ます、或は偶會(チャンス)だと思つて居ます。それで人生の悲慘の極も歡喜の極も感じません、しかし二者の中孰れかといひますならば、悲慘の少々を感ずるばかりです、それで今日の有名な小說家の描くことは、僅少の悲慘ばかりで大なる悲慘は絶えてない、歡喜に至りては絶えてない。

此の源因は何處から來たかといへば、一は國民的特性(キャラクテリステック)かも知れません、日本人の面相は外國人から見て大へん悲相を帶びて居るといひます、併しその最大源因は、さうですね、何



といひませうか、日本化された佛教、modified Buddhism の結果だと思ひます。前にも申しましたやうに、佛教それ自身は「高貴なる悲慘」ですが、よく調べて見れば、佛教は悲慘ばかりではない、歡喜の要素があると思ひます。しかし普通日本に行はるゝ佛教の教義、儀式、佛堂の建築などを見ますれば、此の歡喜の方面は絶えて現はれて居ませんと思はれます。平家物語の「祇園精舍の鐘の聲」の句は、實に日本人の腹に染み込んだ觀念でせう。時としては太平記思想ともいふべき實に高尚なる思想がありまして、此の悲慘思想に打勝つたことがありますが、全然打勝つたことは無いでせう。古來日本人中のよく事理を解した人に、「人生は」と問へば、「悲慘なり」といふより外の答はなかつたのです。そこで私の結論は、我田引

水かも知れませんが、愚見によれば、「此の悲慘の人生はやはり歡喜の人生である」といふ觀念を强く人類に與へたものは基督敎だと思ひます。勿論基督敎にも色々弊害もあり迷信もあることは、私は他の人より一層よく知つて居ますと思ひます、然し我が狹い學問で見たところによりますれば、「生は死に勝てり」といふ大敎義は、佛敎にも孔子の敎にも見たことはありません、たとひ基督敎から得るも哲學から得るも、そこは私の關するところでありませんが、「生は死に勝てり」とか「歡喜は悲痛より多し」とか、或は「希望は絕望に勝る」とか、さういふ觀念が文學者に染み込みませんでは、如何しても人生を益する大文學は出でないと思ひます。勿論文を練ることも必要でせう、大著述家の文體を學ぶことも必要



でせう、けれど文學者銘々が人生の最大問題を心に解釋するまでは、彼等の筆より大なる作の出やうはづはありません。

（早稻田文學）

## 米國詩人（口述）

記者一夕内村鑑三氏を青山の寓に訪ふ。戶を排して入れば玄關の障子に一枚の半紙を貼附して曰く、多忙に付き當分の中、說敎、演說、講話等の依賴を謝絕すと。此一事已にその人物の如何を推察するに足るものあらん。稜骨、電眼、一見して氣坐ろに人を襲ふを覺ゆ。警句奇想口を衝きて出で、或は心膽を寒からしめ、或は破顏一笑せしむ。胸中常に一種の活火の燃々たるものありて、多感多血の性なり。或人曾て氏を評

して曰く、彼は一たび惡人なりと信ずれば、その行動悉く之を惡となし、善人なりと信ずれば、その行動悉く之を善となす、余の敢て爲す能はざる所と。夫れ或は然らん乎。氏先づ記者に謂ひて曰く、余は

近世の人に説教するを好まず、寧ろ彼等を咀ふ。知己を百年の後に求めて、余が滿腔の抱負を談せんのみ。爾來余が著述する所の書、皆な僅かに、一小冊子に過ぎず、故に向後三十年を期して大著作を爲し、聊か世を裨益し以て斃れん事を冀ふと。談偶々一轉して

米國詩人

の事に及ぶ。余居常思へらく、米國詩人は英國詩人よりも遙に偉大なりと。蓋し英國の詩人多くは活動世界を遠ざかつ



て、山紫水明の間に隱遁するの風あり。スコットのアボットフォルドの古城に於ける、ウォルヅウォルスのライダル山の幽棲に於ける、テニソンのウィチンハムの閑居に於ける、みな然らざるはなし。然れども米國の詩人は之に反し、普通の生活を營みて、活社會に活事業を擔當す。從ひてその歌ふ所また趣を異にし、一は悠々月雪花を友とする我邦の所謂詩人なるもの多く、他は近く人間と相親しみて、その生活を歌へり。斯くの如く二者の間その趣を異にするに至れる所以の一源因は、或はその社會の組織に基因するものあらん乎。米國は自由の郷にして平民の社會なり、故に才能に從つて志を暢ぶるに易し。英國は階級の制嚴にして才を行ひ志を遂ぐること難し、故に勢ひ身を風月に托して以て心を此

に專らにするに至れるならん乎。余はあまりにロングフェローの詩を愛吟せず。されど彼は初ボードイン大學に近世語學の講師となり、後移りてハーバード大學に同じく近世語學及び美文學の講師たりき。ブライアントは法律學に曉通し、新聞記者及びその所有主として一生を送れり。其最も著名なる詩はサノトプシスにして、死を歌へる者なり。「年の洪水」と題せる詩中、人生を逆卷浪の一上一下するに譬へ、佳人才子相携へて忽ち現はれ忽ち沒するの狀を歌ふ。讀來りて其想の痛快なる未だ曾て案を拍て嘆賞せずんばあらず。其他中央亞米利加の地、雲烟茫々、一目千里、更に際涯を極めざる原野を歌ひて、天空の漠々たるに適はしき床なりと言へるが如き、また羅馬の舊都に遊び、一夜地上に臥し、土砂動め



き叫んで榮枯盛衰、幾千年の歷史を談るを聞くと言へるが如きは、正に是れ奇想天外より來ると謂ふべきに非ずや。ホイチエルは幼にして小作人の丁稚となり、また履屋の小僧となれり。長ずるに及び政治家として立法の事に關係し、非奴隸黨の書記となりて國事に勤めたり。その詩多くは人生の活問題を捉へ來りて、人道を發揮せり。潔白優雅、英國詩人の及び難き所なり。ローエルはロングフェローの後を繼ぎて、ハーバード大學に近世語學の講師たり、また伊班牙及び英國に使節たりしとありき。余は道德的詩歌中、未だローエルの詩の如く高尚雄大なる想あるを見ず。ホイットマンは想を重じて形を問はず、在來の詩風を破壞して一新機軸を出せる詩人なり。而して世人カーライルの雄渾偉大なるを

畏敬すれども、余はホイットマンの人物の遙かに物表に亭々として幾層の高きに在るを見る。

我國民は未だ米國詩人の眞價を知らず、これ實に歎ずべきことなり。余は特に俳諧師輩の漫りに風流を事として、社會を茶にし、或は悲觀的厭世家の徒らに物の哀をのみ歌ひて生活を尊ばざる傾向ある我邦に於ては、米國詩人の如く人生に近づき、普通の生活に裨益ある詩歌を紹介して、健全なる詩風の行はれん事を希望する切なり。（福音新報）

## 史學の研究

我は過去の結果にして未來の源因なり、人、人のみは進歩的動物なれば、彼は考古的にのみ解するを得べし、我に元始的



祖先の純白無害なるあり、熊襲八十梟の猛烈馴致し難きあり、我曾て守屋となりて外敎を排し、清麿となりて妖僧を逐ふ、我は時宗の斷を賛し、西海の怒濤に胡氛を殲せり、我は櫻井の遺訓に與かり、民舍に七生の冀望を懷けり、豐公絶大の志望は我の慾なり、清正入道の蹂躪は我の功なり、我は聖德を湖西の藤樹に學び、農理を嶺東の尊德に聽けり、我は鷹山の爲めに誇り、南洲ありて我は世界に大なり、我は實に日本二千年間の作なり。

而して細瑣たる東洋一孤島の民たるに安せず、自ら進みて世界の市民たるに及びて、我は益、廣濶雜駁なる我となれり。

我は猶太人に依りて我神を拜し、希臘人に依りて思惟し、羅馬人の律に從ひ、獨逸人に思惟信仰の獨立を得、英吉利人に憲

法を享け、法蘭西人に文化を施かる、耶利米亞は我が爲に哀歌を謳へり。プラトーは我が爲めに哲理を講せり、レオニダス我が爲めに虐王の暴威を挫けり、シーザー我が爲めに北歐の蠻奴を化せり、ダンテ我が爲めに三界の苦藥を味ひ、ゲーテ我が爲めに新紀元の理想を示せり、ルーテル我が爲めに宗教的自由を供し、我亦ボルテヤ、ルッソーの蹟に負ふ所尠からず、我れ今日憲法國の民たらんが爲めには、グラカイ兄弟は殺戮せられたり、モントフホート公サイモンは、イーブスハムの戰場に斃れたり、コリニエーはギース族の殘害に遭へり、ライデン城は灌せられて其市民の過半は饑餓に死せり、ハムプデン銃丸に斃れざるべからず、クロムウエル白殿に泣かざるべからず、ワシントン劍を拔かざるべから



す、而して世の掌權者の頑愚なる、佛國革命も米國獨立も彼等の瞑を開くこと能はざるが故に、世が十九世紀に入りてより尙も仁人勇者の奮起を促し、伊にマヂニ、ガルバルヂ立ち、露にヘルッェン起り、佛にレドルーローリン出で、洪にルイ、コスートありて民の悲運を唱へて高く、流竄困苦生を弱者の救濟に供して僅かに今日あるを得しめたり。憲法的日本は世界の日本なり、之を正解せんとするに神皇正統記を以てのみ爲すべからず、シーザー之に與かりて力あり、コリニー之が爲めに血を流せり。明治の日本を以て日本のみの日本と做す、無識之より大なるはなし、世界偉人の協同に由りて成りし日本、之を知るに全世界の歷史的智識を要す。

我にして斯の如くして斯の如し、故に我を知るに過

去の全世界を知るを要す。哲人エマルソンの言實に然り。

"I am owner of the sphere,
Of the seven stars and the solar year,
Of Cæsar's hand and Plato's brain,
Of Lord Christ's heart and Shakespeare's strain."

我は世界の持主なり、
森羅萬象我物なり、
シーザの手腕プラトの腦、
イエスの心も沙翁の技も

歴史を知らざるものは目前目下の人なり、社會の現象は個々獨立して彼の耳目に觸れ、小兒が繪畫に對するが如く、庸醫が病を察するが如く、事物を判するに僅に目前當時の動



勢を以てす、彼の觀察は枝と葉とに止まり幹と根とに達せず、其結果たるや彼は往々にして狂信的夢想漢となり、改革家と稱して急劇なる社會の改造を畫し、其彼の意に從はざるあれば、忽ち憤激して社會の怠慢を怒り、進みて挫折するにあらざれば退きて鬱死するに至る、彼の擧動の小兒的なるは彼の觀察の目前的なるより來る、現在は過去の結果なれば之を治するに古を考へざるべからず、恰も名醫の病を治するに方りて發熱に對して必ずしも下熱劑を用ひず、苦痛を去るに必ずしも鎭痛劑に依らず、先づ病根に溯りて其排除に從事するが如し。歴史を知ると知らざるとは、學と無學との別なり。學(science)何者ぞ、源因結果の智識ならずや。英語の history (歴史)なる語は、希臘語の historia より來り單に「學」の

意なり。歴史は人生社會の學なり、歴史に暗き事は社交的に野蠻人たる事なり。

歴史を知らざるものは狹隘の人なり、彼は人類の一團體なるを知らず、彼は個人的又は國家的生涯あるを知りて、世界的人類的生涯あるを知らず、恰も鰡魚麥魚の類が、小池あるを知りて大洋大河あるを知らざるが如し。知らずや濁流溢れ來りて小魚の巢穴を犯す時は、潦雨遠山の柴深を濕し、暴流斷橋を沒する時なるを。一國の利害は宇內の利害にして、人類に關する事項にして遂に我身に及ばざるはあるなし。

歴史は人類各部の關係を敎ふるもの、歴史に依りて吾人は人類の聯結 (consolidarity of man) てふ哲學的大原理を知るなり。自大的國家主義は常に歴史敎育の缺乏より來るなり。我



をして謙虛の民とならしむるもの、我の眞價を覺り、他を敬ふを知りて自己の尊嚴を維持せしむるものは、宏量なる歴史的攷究と觀察とより來る。

倫理學的例證としての歴史の効用に就ては、余贅の言を俟たずして明かなり。過去は其儘に繰り返すものにあらず、然れども同樣の源因は、必ず同樣の結果を來す。同一の倫理的法則は、古今を通じて働きつゝあり。歴史は實例を以て敎ふる倫理哲學なり。小島法師の太平記序文は史學日進の今日尙ほ變更すべからざる確言なり。

蒙竊探古今之變化、察安危之來由、覆而無外、天之德也。明君體之保國家、載而無棄。地之道也。良臣則之守社稷。若夫其德缺則雖有位不持。所謂夏桀走南巢。殷紂敗牧野。其道違則雖

「有威不久。曾聽趙高刑咸陽、祿山亡鳳翔。是以前聖愼而得垂法於將來也。後昆顧而不取誡於既往乎。」

若し夫れ歷史の快樂に就ては、余輩の爰に多く曰ふを要せず、喜びて歷史を讀み得るものは、恒に觀劇の快と樂とに與かるものなり。弱志男女と席を共にするにあらずして、道德的危險を冒すにあらずして、父兄の財を浪費するにあらずして、常時活劇を觀るの歡を有するものなり。世に事實に勝る悲劇戲劇のあるなし。吾人若し人情の奧意を知らんと欲せば、何ぞ殊更に劇作者の劇曲に倚るの要あらんや。歷史は實に志士の快樂なり。英の批評家ウヰリヤム、ハッリット(William Hazlitt)は云へり。

若し劇場は吾人に示すに人の假面と世の外裝とを以て



するなれば、書籍(殊に歷史を云ふ)は、吾人を彼等の精神に導き、吾人心底の蘊奧を吾人の爲めに開くものなり。

萬世の智惠と技藝と心情とは歷史に込めり、之に臨むは寶化の山に入る事にして、世界の賢人君子と交を結ぶ事なり。歷史は、幼時の教導者、老年の知客、寂寞の時の吾人の慰藉、吾人の憤怒を靜むるもの、憂慮を愈するもの、失望を除くものなり。

歷史の定義幷に區域

歷史は人類進步の記錄なり。

一個人の發達進步を叙記せしもの之を傳記(Biography)と云ふ。

國家を一個獨立人と見做し、其發達進步を錄せしものは、國

家歷史(National History)なり。

人類を團體的一個人と見做し、其發達進步を論述せしものは、之を世界歷史(Universal History)と云ふなり。

國家の進步に關係なき個人の生涯は、國家歷史に編入せず、世界の進步に關係を及ぼさゞりし國民の歷史は、世界歷史の材料にあらず。歷史的人物とは、人類全體の進步を助け、或は碍げし人なり。歷史的國民亦然り、ワシントンは歷史的人物なり、彼の生涯は人類進步に關する大なればなり、武藏坊辨慶は歷史的人物と稱ふを得ず、彼は日本人中著名の人物なれども、彼の生涯の感化力は人類全體に及ばず。希臘人は小國民なれども歷史的國民なり、其世界文化を翼けしこと著大なればなり、シベリヤは大國なれども歷史的國家と稱ふ



を得ず、其今日に至る迄人類進步に拘はる皆無なればなり。世界進步の大流に加はるに及びて個人幷に國民は歷史的たるに至る。伊太利戰爭以前のナポレオンは未だ歷史的人物にあらず、ミランの一戰墺軍を挫きてより、彼は世界の注目に上れり。維新以前の日本人は歷史的(世界)國民にあらず、然れども奮然蹶起して世界に仲間入りするに及びて歷史的國民となれり。

人類進步を河流に譬へんか、歷史は幹流、國民は枝流、個人は枝流に注ぐ細流なり。枝流細流共に幹流に合して後始めて歷史的たるに至るなり。枝流の幹流に合するに前後あり、希臘羅馬の如きは、幹流水源を發して未だ幾許ならざるに已に之に注入せしものなり。米國、日本の如きは、本流の水源を

距る遠き下流に於て之に合せしものなり。人類の大流が洋々として海に注入する時は、世界の國民が悉く之に合流せし後にあらむ。日本は英、佛、獨等に後れて本流に入れり、故に吾人は歴史的に後進國なり。前後は天の命なり、利根の枝流吾妻は先に入りて混濁下流を汚し、碓氷は後に來りて全流爲めに列し、事物の前後は依りて其優劣を判せず、之を小兒の嬉戲と謂はずして何ぞ。

幹流に合し之を感化するに方りて、枝川全流の歴史は、幹流の歴史を解するが爲めに必要なるに至る。波斯戰爭以前の希臘は、世界的國民と稱ふを得ず。然れども世界文明が此小國民に負ふ所多きが故に、其起源、發達、思想、美術は、歴史的に緊要なるなり。文明世界が我日本歴史を訪査推究するに至る



は吾人の思惟が宇内を感化し、人類の進歩が吾人の行爲に負ふ所ありて後にあり。愛國的詩人シルレル曰く。

最强國民と雖も、一小片たるに過ぎず、故に其運命にして人類全體の進歩に關係を及ぼさゞる事項は、吾人を感激するに足らず。

故に歴史家の着眼點は人類の進歩なり。如何に自ら大を誇るも、如何に自ら尊きを飾るも、世界を益せざる國民は、歴史の裁判廷に於ては小國なり矮民なり。

### 歴史の兩眼

歴史は人類が演ずる劇(Drama)なりと曰ふを得べし。康熙皇帝は吟じて曰へり。

日月燈、江海油、風雷鼓板、天地間一大戲場、堯舜旦、湯武末、莽

## 曹丑淨、古今來許多脚色

歴史に時代的順序あるは劇に齣と幕とあるが如し。而して邦土は歴史の舞臺なり、時代と地理とは歴史を正解するの二大眼なり、故に此二者を稱して歴史の兩眼と云ふ。

世界歴史の紀元は耶蘇基督生誕の年なり、是れ第六世紀の頃、佛國の僧デオニシャス(Dionysius)の定めし所にして、羅馬建國の七百五十三年、希臘「オリムピャル」祭第百九十四回の第四年、バビロン王ナボナサー即位より七百四十七年に相當す。即ち普通吾人の使用する年表に依れば、西洋紀元は我の垂仁天皇三十年にして漢の平帝元年なり。僧デオニシャスの定めし紀元は、基督實際の生年より四年の後にあり。然れども習慣の久しき今日之を改むるの要なきより、歴史家



は誤謬を認めつゝ之を使用し來れり。要は確實なる時の標點を得るにあり。之を我に取らずして彼に取るは、單に便益上よりなすなり、恰も英國の子午線によりて我の時間を度るの類なり、吾人の愛國心は斯くの如き細事の爲めに減却せず。

地理學と歴史の關係に就ては、余は爰に喋々するの要なし、余は拙著「地理學考」に於て之を詳論せり、此講義録の讀者にして彼の書を一讀するの勞を取られん事は余の切望する所なり。そは世界歴史の一面は、彼の書に依りて讀者に紹介せらるべければなり。

善良なる年代記と萬國輿地圖とは、歴史攷究者の座右を離るべからざる必要具なり。若し不知の年代又は地名に接す

るあれば、之を探らずして經過する勿れ。時と處とを確めざる歷史的思想は、漠として據るべきなし、史學の嫌惡は意を此點に注がざるより來ること多し。

### 歷史の區分

歷史は人類發達の記錄なれば、之に判然なる段落のあるべきなし、故に所謂歷史の區分なるものは、多少任意的なるを免がれず。然れども史學攷究の便益上より、之を時代(Age)時期(Period)等に區分するを常とす。

世界歷史普通の區分は左の如し。

一、古代史――人類創造の時より紀元四百七十六年西羅馬帝國の滅亡に至る。

二、中古史――紀元四百七十六年より一千四百五十三年君斯担堡の陷落に至る。



三、近世史――紀元一千四百五十三年より今日に至る。

英國の歷史家博士フリーマン氏の區分は左の如し。

一、羅馬以前史(Ante-Roman History)

二、羅馬史(Roman History)

三、羅馬以後史(Post-Roman History)

是れ能く歷史的哲理に合ひし區分なりと信ず。そは泰西の歷史は、羅馬に中心し羅馬より分枝せしものなればなり。歐洲思想發達史の著者なる博士ドレーパー氏は左の區分を賛せり。

一、質問時代或は幼年時代。

二、信仰時代或は青年時代。

三、理論時代或は壯年時代。
四、老衰時代或は老年時代。

是れ人類全體を一個人と見做して論せしもの、故に歴史を稱して社會の傳記(The Biography of Society)となせり。

以上何れの區分法に從ふも大差なし。然れども余は歴史家の常規に依り、第一の區分法に從はんと欲す。

(普通學講錄義)

## 傳記學の研究

歴史は人類の發育學なり、而して發生、發育、發達の理を一個人に於て攷究する、これを傳記學と稱ふなり。之を人類全體に於てするも、或は一個人に於てするも、其理は一なり。蓋し



社會個人共に生體(オルガニズム)にして、前者は大文字を以て後者の悲哀、歡樂、成長、枯衰の狀を顯はす者に過ぎざればなり。

人世を解するに二途あり、之を史學的にするあり、之を傳記學的にするあり。恰も自然を解するに二途あるが如し。宇宙(コスモロ)學的(ジカル)にするの法其一なり、解剖學的(アナトミカル)にするの法其二なり。前者は總合的に觀察し、後者は分析的に解釋す。最も大なる總合勿論乾坤の一隅を窺ふに過ぎず、最も密なる分析勿論宇宙の最微に達せず、宇宙學は大なる解剖學にして、解剖學は小なる宇宙學なり。そは係聯重複は宇宙(Cosmos整體と譯すべし)の特性なり。大は小の膨脹せし者にして、小は大の收縮壓搾せし者なり。一滴の水に宇宙の相あり、(然り小宇宙なり)望遠鏡に映ずる海王星は、朝暾に輝く露の一滴に過ぎず。植

生は一片の草葉に代表さる。正しく石塊を解せし人は全地球を悟りし人なり。小宇宙は宇宙より組織され、其端邊を知りて其全體を窺ひ得べく、其全體を知り悉くすに非ざれば端片を解し難し。

人世を學ぶも亦此の如し、之を全體よりすれば歷史學となり、之を社會の一分子たる個人よりすれば傳記學となるなり。社會は最大個人なり、故に歷史は社會の傳記學と稱するを得べし。前者は人世の宇宙學にして後者は其解剖學なり。而して一滴の水に宇宙の映ずるが如く、社會の現象は個人の生涯に顯はる。

粗より密に及ぶ是れ史學の途なり、密より粗に達す是れ傳記學の方なり。日本を學ばんが爲めに富士山を攷究する、是



れ史學研究の方に倣ひしなり、富士山を攷究せんが爲めに日本全土の構造に及ぶ、是れ傳記學的研究法なり。傳記學を膨大して歷史あり、歷史を注聚凝結して傳記あり。歷史は大なる傳記にして、傳記は小なる歷史なり。

歷史的に人生を攷究するの便と利とは、其外形に於て浮沈盛衰興亡の源因結果を明瞭に考察し得るにあり。ソクラテスは公道履行の探究を『大文字を以て書かれたる歷史』に於てするの要を解せり。天道は傳記學的に是なる事少きも、歷史的に非なる事稀なり。傳記學的のナポレオンは時には仁君慈主として露はるゝ事あるも、歷史的のボナパートは社會の舊組織の破碎者として見るに足るのみ。傳記學的にクロムウエルを評すれば、殘忍、無慈悲、平和の擾亂者として現はる、

然れども歴史的に彼の偉勳を述ぶれば、彼は自由進歩の師父なり。義は個人的に曲げられて國家的に人類的に建てらる。正道は歴史面に大書され、讀む者をして至少の懷疑なからしむ。

（世界之日本）

## 西洋文明の心髓

文明とは一國民又は一人種の物的智的幷に心靈的啓發の總計を謂ひ、西洋文明とは歐羅巴人種に因りて得達せられし此啓發の合稱なり。

歐洲文明に一種異樣の特質あり、之を古代の埃及、希臘文明に對照して明かなり、之を東洋文明に比較して歷然たり。露人勿論英人と全く相均しからず、然れども彼の政治的思想



に於て、宗教的觀念に於て、人生哲學に於て、露人は英人の親戚にして支那人の他人なり。

文明に三元素あり、人種的地質其一なり、智識的系統其二なり、心靈的同感其三なり、而して三者の交互的働作より異種の文明來る。蒙古人種に施すに殷周の學を以てし、之に吹入するに孔孟の家長主義を以てしたれば、支那の回顧的文明は出で來れり。アリヤン人種に東洋的思想を注入して印度文明あり、匈奴に歐洲的敎育を施してコスート、バッティヤニの洪牙利國あり、文明は解し難きの顯象にあらず、其元を知りて其末を量る易し。

西洋文明の地質はアリヤン人種なり、其元は或は天山脈の西麓にありと云ひ、或はスカンヂナビヤ半島にありしと云

ふ、歴史以前既に東は印度半島より西は氷島(アイスランド)に至る迄の地を占領せし人種なり。今はケルト人種として、愛蘭土、ウェールスに存し、チュートン人種として、北歐樞要の地を領し、ギリシャ＝ローマ人種として南歐を保ち、スラーブ人種として東歐に張り、イラン人種として波斯に古代の文明を保持し、印度人種として羈絆の恥辱に沈む。新大陸一千五百萬方哩はアリャン人種に新故郷を供し、南洋四百萬方哩亦其領土となりて存す、亞非利加一千二百萬方哩も今や全く其分割する所たらんとし、亞細亞の大半既に其有に歸し、殘半亦終に永く其侵畧を被らずして止まざるべし、世界の主權今や彼等の掌中にあるが如く、若し新勢力の天外より臨み來るありて彼等を抑壓するに非ざるよりは、余輩は彼等の膨



脹力を限るに地球面上一つの防碍物あるを認むる能はず。

アリャン人種の特性は其强健なる抽象力にあり、彼等は物に接して物の理を探るの慾念を有し、蒙古人種の如く眼を僅かに事物の實用に留めず、又セム人種の如く直感を以て足れりとなさず、故に希臘に於ては早くより審美哲學となり、科學的造化說となり、合理的宗敎となり、波斯に於ては始めて法律の念を發起し、善惡二元論の秘密に達せり、若し夫れ雪嶺の南恒河の岸、叢棘鬱林千里に亘る處に在らしめば、幽邃探り難き印度敎となり、釋迦牟尼佛の大慈悲敎となりて、東亞六億の衆生を濟度せり。歐洲文明の未だ生れざる前に、アリャン人種は已に蓋世の氣運を示せり。

アリャン人種の抽象力に加ふるに彼等の服律の特性ある

あり、彼等は自主獨立を愛する民なるが故に、人の臣下たるを好まざりし、然れども彼等は擇んで律に服し法に膺り、秩序規條を守るの民として知られたり。セム人種の法律なるものは重に宗敎律にして、希伯來人の摩西律の如き、亞拉比亞人のコーランの如き、今日吾人が稱して法律となすものとは全く質を異にす。蒙古人種の法律なるものは治國平天下の爲めに設けられし禁令制規の類に過ぎず。人と人との自然的關係を明かにし、天賦の權利を論じ、自由平等の大義を指示する法律に至りては、是れアリヤン人種の特產物と稱せざるべからず波斯文明に早く已に此服律の性ありしは、余輩の前に述べしが如し。然れども羅馬人に由りて其著るき發達を見るに至り、シイザー、ジャスチニャンの手を經由せ



し羅馬律なるものは、今猶は無比の法典として文明世界に稱揚せらる。武を以て謂はん乎。匈奴鐵勒は歐亞を征服するに至れり。然れどもタイバー河邊七丘の民にして終に太古の七大帝國を併呑するに至りし事は、單に彼等の尙武性にのみ歸すべからず。兵は應變の具にして法は常治の道なり。アリヤン人種の服律性は、世界の競爭塲裡に於ける最終の勝利者として彼等を指定せしが如し。

以上は余輩が目してアリヤン人種の特質の最も顯著なるものとする所なり。而して西洋文明に此誤まるべからざるアリヤン性の存する事は、何人も疑ふべからざる事實なり。然れども西洋文明は、アリヤン文明と稱すべからず。そはフイン人、洪牙利人の如く、蒙古人種にして西洋文明を繼承發

揚するものあれば、印度人、波斯人の如くアリヤン人種にして、東洋的文明に沈淪するものあればなり。テヘラン、イスパハンに、崇火教の迷信の熾に行はるゝあれば、フィンランドのヘリシングフォースに歐洲屈指の大學の榮ゆるあり。西歐の文化に對比しカース、アルメニヤの猶ほ半開明の迷夢を脱せざるあり。又希臘、羅馬の如く、一時は彼等のアリヤン性の啓發に依り、宇内を風靡するに抵りしも、終に全く消滅に歸して、國民として今や全く跡を留めざるあり。アリヤン人種は優等人種たるに相違なし、然れども今日吾人の稱する西洋文明なるものは、アリヤン人種附隨の文明と見做すべからざるは、日を睹るよりも瞭かなり。

智識的系統より謂へば、西洋文明は、希臘哲學の末流なり。希



臘は太古の智識を綜合し、美術をバビロン、埃及に承け、文學をタイア、シドンに學び、ナイル河邊の科學を繼ぎ、イウフラット沿岸の技藝に習ひ、之に施すに彼等の靈明を以てしたれば、古今未だ曾て其例を見ざる智識的開明は希臘人に依りて世に出でたり。

希臘文明の上達に就きては今日吾人の殆ど推測し能はざるものあり、圓滿完備せるプラトーの哲學は、今尚ほ西人の及ばざる所となり、アリストートルは理財學の師父として仰がるゝのみならず、彼のポリチックスは今日尚ほ模範的政治論として貴ばる。フイヂヤス、ブラクステレスの美術は、萬世の龜鑑として存するなるべし。ゼノフホン、ヘロドータスの歷史は、其哲理的觀察に於て、其端嚴高莊なる文體に於

て、後世是に優るの作は見るべからざらむ。エースキラスの悲劇、アリストフハニスの戯劇は、十九世紀の智識の程度を以てするも、尚は能く咀嚼歡享する難しと。遺傳論を以て有名なるフランシス、カルトン氏の言に據れば、

雅典人種の智能の平均は、最も低く見積るも、吾人今日の程度に二段を加へたるものならざるべからず、即ち吾人の彼等に於けるは、亞非利加土蠻の今日の歐羅巴人に於けるの比例なり

と。六千方哩に足らざる小邦にして、其智能の發達に於ては二千五百年の昔、今日の英獨を凌駕すること數等、文明の標準若し智能の發達にありとすれば、吾人は未だ希臘人に及ばざる遠し。



希臘文物に清爽新精氣を流傳するが如きあり、之に接するは屍骸を復活せしむる事なり、枯木に花を咲かしむる事なり、灰燼に點燈する事なり。頭腦の刺戟力としては、天下之に優るもの他にあるなし。

故に世界歷史に於て希臘思想の輸入は、常に敎化の復活振興を意味せり。歷山王の西亞征服は希臘文物の撒布を來し、忽ちにしてシリヤ、バビロンの沙漠は雅典文化の春を呈せり。死せる埃及すらも、尚は此女巫の幻術に抗し難く、プトレミー王統の新プラトーの學派を生み、五世紀間の長き其歷山市は世界智識の樞府たりき。下りて十三世紀に至り、歐洲を其長き迷夢より喚起せしものは、亦紀元以前の希臘文物なりき。

ダンテの詩作、ジヨツトーの美術、コロムブスの探撿、ルーテルの改革、共に所謂「古文復興」の餘波と稱せざるを得ず。歐洲社會の智識的一面は、確かに希臘文敎なり。其風儀、美術、文學、政治、學術、技藝に於て古き小なる希臘は、文明世界を敎導しつゝあり。

然れども西洋文明は希臘文明の繼續者にあらず、兩者自ら其本質と經歴とを異にす。前者は後者を吸收同化せしに止りて、之に併呑せられしに非ず。前者は異人種の相互的働作より來りし社會の有機的生長の結果にして、後者は天才に富める一人種の智能的得達に過ぎず。前者若し大明の蒼穹に懸り、年毎に光を加ふるに比すべくんば、後者は飛光閃々暗瞑の裡に金蛇を畫く流星なり。希臘文明はアリヤン人種



の開花時期として見るを得べし、其根抵生命と稱すべからず。

希臘文明は智的文明なり、美術、文學、政治、哲學の發達なり。其埃及文明の單に實用的たるに比して、其フイニシヤ文明の商賈的たるに較べて遙に優等たりしには相違なし。然れども社會の保存力としては、人情の啓發力としては、甚だ微弱たるものなりき。美麗雅飾の念は、其養成する所たるも、公義仁慈の感は、其獎勵する故にあらず。文學的安逸は人の追求する所となりて、勞働は賤められ、犧牲的生涯は嘲けらるゝに至る。大學の崇拜は德義の衰退を來たし、秀才世に跋扈して、剛と直とは頭を擡げざるに及ぶ。

故に希臘文明は希臘其物をも救ふこと能はざりき。雅典の

文化其極に達して、其武は消盡し、其德は滅滅し、學者は文を操つるを知りて民を導くを知らず。人生は戯劇と化して敬畏端肅の念は全く迹を絶てり。智的文明は個人の修養を促すと同時に其慾心を高め、其廉耻の念を鈍くし、自己を思ふことを切にして、他と公衆とを念はざらしむ。國家と社會とを思はざる個人主義とは、智的文明の特産なり。慾は學理的辯護せられ、德は哲學的に嘲弄せられ、社會各層各部を緊束するの力は失せて、其離散は免かるべからず。人類は智に於て別れ、情に於て合する者なり。希臘文明は智能の特達なり、分裂と破壊と死滅とは、其特性と稱せざるを得ず。

希臘本國に於て然り、プトレミー王統の下の埃及に於て、十三世紀の伊太利に於て、革命以前の佛蘭西に於て、希臘文明



は上流社會の開明者として現はれしも、國民の精氣を復活し、社會の成實を促し、文明其物の保存と發達とを撥くること能はざりき。希臘文明の復興は、常に道德の紊亂を以て終れり、無神論と優柔なる哲學とを産せり、常に識者の自由を讃して、下民の抑壓無學を來たせり。所謂「文學復興」なるものは、自由平等の復興を意味せず、大思想の産出を助けず、大發明大探見の原動力とならず。希臘文明は歐洲人の裝飾たるに過ぎず、之に交際的儀式あり、文學的光彩あり、政治的秘訣あり、哲學的眞理あり。然れども人と人との關係、人生の眞意味、社會存生の土臺的原理…………是れ人類が希臘人より學び得し者にあらず。

故に西洋文明を其發芽時代に於て、北方蕃人の手より救ひ

し者は希臘文明にあらざりき。獨逸民族の開明馴化は希臘文明の力にあらず、ラフエル、アンジェローの美術は其模範を希臘に取りしも、其理想は希臘人より來らず。ダンテの大作は模形を羅馬の古典に借りしも、其精と神とは他の泉源に於て汲めり。コロンブスの發見は其立證をアリストートルの言に求めしも、其主眼は希臘文明の擴張にあらざりき。ルーテルはプラトーの名を以て起たず、和蘭瑞西に於ける自由の勃興は、雅典哲學の促せしものに非ず、英國の憲法政治は據るに希臘の古典を以てせず、新イングランドの建設者はソクラテスの崇拜家にあらず、ガリレオ、ニユートンの發見は科學以外の示導に依りし事を記臆せざるべからず。而して降りてアダム、スミスの經濟論に至るも、モルトケ將軍



の軍備的設計に至るも、カントの倫理説に至るも、ビクトル、ユーゴーの小説に至るも、西洋文明の最大主動力は希臘文明以外に求めざるべからず。希臘文明は希臘其物をさへ維持すること能はざりき、況んや歐洲と世界をや。西洋文明を以て單に智的文明の發達なりと信ずる者は、皮相見の最も甚しきものと謂はざるを得ず。智は之を使役するの意志を要す、智は智其物をも保存發育する能はず。無究の發達力は智性に存せずして靈性に在り。

アリヤン文明にあらず、希臘文明にあらざる西洋文明は基督教文明なり。余輩の之を唱ふるは、余輩の宗教的偏執に依るなからん事を欲す、余輩の提議に確實なる科學的理由と歴史的立證なかるべからず。又余輩は社交力として基督教

を賛するに當りて、其基督敎會の名稱の下に、西洋文明に加へし幾多の殘害を忘るべからず。余輩は西洋歷史に顯はるヽ基督敎土臺敎義の働作を究めて、特種の神學說の辯護を試みざるべし。余輩は亦歐人の人種的特性と智識的系統を輕んずべからず。余輩の攷究は緻密と分別を要する多し。基督敎に定義を附する難し、然れども余輩の稱する其土臺的敎義なる者は、之を指定するに難からず。基督は彼の總ての敎訓を左の二大箇條に收めたり。

第一、爾心を盡し意を盡し主なる爾の神を愛すべし。

第二、已れの如く爾の隣人を愛すべし。

前者は道德の泉源を示し、後者は其實行を敎ふ。人生の最大目的は利を得るにあらずして、智を樂むにあらずして、神を愛し



彼に事ふるにあり。而して神に事ふることは、特種の禮式に參するにあらず、乳香沒藥を捧ぐるに非ずして、人類同胞を己れの如く愛するにあり、若し他の敎義の尊戴履行すべきあれば、是れ此二大箇條の實踐を援けんが爲めなり。若し禮典の守るべきあれば、是れ此二大箇條の實行を翼せんが爲めなり。純粹なる基督敎なるものは、此二大箇條の遵命に外ならず。アタナシアスの三位一體論も、グレゴリー法王の莊嚴なる禮拜式も、ルーテル、カービンの自由神學說も此二大箇條の循行に外ならず。

勿論希臘文學に敬天愛人の敎訓を具へざるに非ず、アリヤン人種の本性に仁慈の念の存せざるに非ず。然れども人生の最大最終目的を以て此二大箇條の實成に定めしものは、

基督教を措きて他にあるなし。希臘人は智を先にし、獨逸民族は力を拜せしに、基督教は其信徒の崇拜物として謙讓溫和なるナザレの耶蘇基督を供したり。基督教に由りてのみ歐羅巴人は平和の貴ぶべきを知れり、貧の卑むべからざるを知れり、慈悲の大功力を覺れり、人類の平等を學びたり。希臘人の理想は鍊磨せる完全なる智能にありき、獨逸民族の理想は强健なる我意の遂行にありき、基督信徒の理想は惡意なき心にあり、我意を殺して神意を充たすにあり。希臘人は學者を尊び、獨逸民族は强者に服し、基督教徒は弱者と平民とを敬ひたり。基督教が歐洲社會に大變動を來せしは、主として此自損的推察性に因れり。

希臘文明を承繼ぎし羅馬帝國は、希臘と同一の理由を以て



仆れたり、智學の欠乏の故に非ずして、詩歌彫工の衰頽の故にあらずして、政治的伎倆の消滅に非ずして、德性の腐蝕の故を以て、社交力の放脫の故を以て、家庭紊亂の故を以て、上流少數の富と智識に對し、下流大多數の貧と迷信の故を以て、奴隷制度の擴張の故を以て、黴毒蔓延の故を以て、公義心敗頹の故を以て、永久の世界王國として仰がれたる、大なる羅馬は壞滅に歸したり。若し法典の倚るべきあれば、世界は未だ曾て羅馬律の類を見ず、若し軍隊の賴むべきあれば、武勇鍛鍊羅馬兵の如きはあらじ。然れども其人生觀の誤れるが故に、其社會組織の弱きが故に、羅馬は自身を支ふる能はず、其光榮を敗墻殘礎に留めて、世界の女主は過去の墳墓に葬られたり。

然れども羅馬の敗滅未だ全からざるに、新社交力は已に世に臨めり。羅馬は憲法國を名として、貴族制度を實行せり、自由平等を唱へて、階級的社會を維持せり、法律面に人權の重きを述べて、千萬の奴隷を使役せり、詩文に勤儉の美德をたゝへて萬邦を擧て其奢侈の料に供したり、羅馬は其理想を實行すること能はずして亡びたり、而して羅馬の忌み嫌ひし基督教は、羅馬の理想の實行者として顯はれぬ。**社會下層の開發は、實に基督教の來臨を以て昉まれり**。其二大教義は、同胞の虐待使役を許さず、奴隷解放は千八百年間に亘る基督教の事業なりき。然れども其端緒は已に羅馬時代に始まれり。下流多數の幸福を犧牲に供して、上流少數の智と富とを致さん事は、希臘文明の傾向なり。階級的制度を破壞し、人



類をして悉く同帝の前に同等たらしむる事は、基督教の結果なり。基督教が羅馬の社會に投入せられてより、世界歷史は全く新方向を取れり。

（世界之日本）

## 慈善家チャーレス、ローリング、ブレース氏逝く

福音的基督教は、善行を以て救靈上價値あるものとなさず、善行は人靈の未來を買ふの値にあらず、依て以て過去の罪を償ふの貨にあらず。又以て全能なる神明に對して人を義とするの價値を有せず、善行は義務と云はんよりは、寧ろ感謝の捧物と云ふべきものなり。世に德義學に明かにして德足らざるの人あり、教理を講ずるに熱心にして社會萬般の

事業に冷淡なるあり、又は所謂社會改良に率先して意思如何を顧みざるあり。教理本心を化し其德溢れて慈善事業となり、善を爲しつゝ自己の善を爲しつゝあるを知らず、聖書に所謂德彼より流るゝの人物は、滔々たる天下幾干かある嗚呼。

余輩ブレース氏の人と爲りを慕ふや久し、然るに不幸にして氏の謦咳に接することを得ざりしは、常に遺憾とする所なり。氏は有名なる敎育家ジョン、ビヤス、ブレース氏の子にして、千八百二十六年米國コンチクチカット州に生る、學をエール大學幷に「ユニオン」神學校に修め、二十四歲にして歐洲に渡り、廣く獨逸、洪葛利、瑞西、伊太利を跋渉し、學校幷に監獄の監理法を視察し、七年にして米國に歸り、紐育府に於て童子救濟



會なるものを設立し、次ぎて新聞賣子合宿舍を建つ。救濟會に於て氏の生存中救助を受けし童子二十萬人、その助力に依りて業に就きしもの七萬人なりと云ふ。爾來歐洲に航すること三回、殊に意を監獄の改良に注ぐ。氏の救濟を施すに當りて常に採りて主義とせし所は、即ち被救者の爲めに自救の道を開き、以て其自尊の精神を喚起するにあり。是れ實に氏の慈善事業に成功ありし所以なり。氏は又健筆にして能く著述に從事し、Short Sermons for News Boys. The Dangerous Classes of New York. Gesta Christi. Unknown God 等は其重もなるものなり。Gesta Christi「一名人性進步に於ける基督の勢力」なる書は、夙く我國或る一部の人士の嗜讀する所となれり。

余輩始めて其書に接するや、思へらく奇なる哉此書名は。余

輩基督教の教理は聞けり―聞倦めり―
曰く天啓の必要、曰く奇跡の有無、曰く教會の設立、曰く其復興、然るに未だ基督教の歷史上慈善事業に及ぼせし勢力の如き積極的の美果に就きて聞きしこと稀なり、即ち囊を拂ひて該書を購求したり、而して之を繙くに及びて、その普通宗教を論ずるの書と異なるを認めたり。其文は平易なれども流暢と稱するを得ず、緻密にして理想に走らず、余輩の感情に訴へずして達理(コンモンセンス)を刺激す、說教者の感話にあらずして、歷史家の論文なり。其序文に曰く、此書の記者(自己を指して云ふ)は、三十年間基督教の原理を以て、紐育府の惡敵を治するの業に從事し、貧苦、罪惡幷に災禍を減少するに於てその力を撿定せりと。以て氏の基督教は、應用的の宗教たるを知る



べし。本論初端に曰く、

世界歷史の一紀元に當りて、人類の歷史上に一道德力現出せり、是れ即ち羅馬帝國一隅の僻地に於て、一朦昧人種の內に生れ、耶蘇基督と稱する非常の人物の言行と教訓とに聚まれり。

全篇五百片紙の趣意は、即ち僻村一工匠なる大道德力にあるが如し。基督の社會を改良せしは、人視の常に達せざる處、即ち社會の裏面に於ける働きにして、世の以て威ありとし、權望ありと仰がるゝの人は、却て此道德力の中心ならざるを示すが如し。氏曰く、

大教師(基督を指す)の歷史上に遺せし純粹なる仁惠の成績を研究せんと欲するものは、先づ世に稱する基督教會

なるものに對する尊敬の多分を除去らざるべからず。

以て基督教と、世に稱する基督教會なるものとの別を明かにし、教會が歷史上言ふに忍びざる腐敗に陷り、鐵血を以て反對者を壓し、思想と學術の進步を妨げ、其言行に至りては、遠く基督の教訓を離れたるを慨嘆し、又曰く

然れども何れの時代に於ても、單純良順なる男女ありて、其名は史上に留まらず、又其存命の時に於ても、著るき異行を以て知られざりしも、其精靈は此信仰の原理を以て充たされたり。此輩徐々に社會の風俗幷に習慣を改めたり、……徐々に教會國家幷に人民全體を淸めたり、……假令ひ多分は教會歷史の記錄に留まらず、大國興亡を記載する歷史家の識認する所とならざりしも、此輩



は基督より受けし眞理を實行し、又之を後來に傳へたり、……此輩は眞正にして眼に見ゑざる基督の教會を設立せり。

Gesta Christi は實に基督教裏面の勢力を示したる書なり。教會歷史上常に隱微の位置を占むる事項は、ブレース氏の手に於て基督教最美の徵候と變じたり。氏曰く「此輩が靜かなる戰場に於て得し勝利は、實に Gesta Christi 即ち基督の行績なり」と。

行績論全篇三十八章、今一々之に批評を下すに餘地なし。太古、中古、近世の時代に於て父子の關係、女子の位置、結婚幷に離婚に關する法令、奴隸賣買、戰爭、萬國公法、拷問、決鬪、監獄改良、貧民救助、禁酒、宗教迫害の禁制等に關する歷史上の事項

と、基督の之に及ぼせし感化力とを說明する館にして密なり、殊に和蘭國々家學者ログーシャス氏の萬國公法論の如き、米國各州に行はるゝ離婚法の批評の如き、賣淫絕滅に關する法令の如きは、實に見るべきの卓論と云はざるを得ず。拷問に關する各國の法令を論ずるに當りて左の言あり。

基督敎を奉ぜざる國に於ては、尙ほ此制(拷問)ありと雖も、耶蘇の敎理の感化力を受くるに從ひ、徐々に廢止せらる。其最も進步せる國(基督敎を奉ぜざる國)なる日本に於ては、千八百七十三年基督敎國の法に倣ひ拷問を以て證據を得るの途は禁止せられたり。

ブレース氏の異敎信者を見るや、寬大にして尊敬を失はず。第三十六章に於て基督敎を奉ぜざる國に於て、慈善事業の



進步を論ずるに當りて註して曰く、

余輩はheathen people(邪敎信者と譯さん乎)なる名稱を用ひ、彼等を總して偶像拜崇に沈淪する野蠻人種と見做すとに深く反對するものなり。基督敎を奉ぜざる國民中、神の眞理の多分を會得せしものあり。

佛敎の起原を論じて曰く、

印度に於て波羅門敎の改革者として現出し、支那、日本其他諸國に傳播せる一宗敎あり。其宗祖の言行と敎訓とは、實に特別の天啓に由ることを示し、ある點に於ては基督の言行と敎訓に最も相近つきたり……實に佛師の敎訓は基督の敎訓の先達者たるが如し。

神聖なる慈悲は、佛師の慈悲より優りしことなし、自捨、好

情、仁愛、憐愍、清淨を教ふるに於ては、釋師の教に優るものなし云々。

然れどもブレース氏は、ある一種の論者の如く、基督教外の宗教を賛賞して、缺點なきものとなすものにあらず。氏は佛教の善美を賞すると同時に、其不完全なる點を論じ、其感化力は、今日文明の進歩に應ずべからざるを示せり。佛法の我日本に於ける結果を記して曰く、

佛法廢頽の最も嘆ずべき例證は、日本現今の有様なり。……舊教(佛法を云ふ)去るに及びて、人慾の潮流を逆止するに、只之に依りて養成されし舊時の習慣あるのみ。公平なる觀察者は曰く、國民擧て放肆不實に流れ、憂鬱の陰影彼等を蔽ふ。釋師の大訓たる人生の終極は皆無なりとの言と



なり、懷疑失望の暗夜全國民を蔽ふと。

ブレース氏ノ下等人民に於けるの仁愛は、劣等國に對する敬禮となり、基督教國人の他教人種を見るに、不敬狹隘なるを論じ、今世を去るの前年、氏をして第二の大著述を爲さしめたり、之を題して Unknown God (不識神)と云ふ。其大意に於ては已に行績論に論せし所と差異なきが如し。氏其終に於て基督宣教師たるものが、他教人に接するの法を論じ、今日基督教の著るき進歩なきは、宣教師たるものが、その感化せんとする異教人の宗教を輕視し、之を公平寛大なる眼を以て、充分に研究せざるを以て一大源因とせり。氏は佛教國に傳道する宣教師たるものゝ説教を擬せり。即ち左の如し。

人情に於ける兄弟よ、余は諸君の美麗なる寺院を見、以て

諸君は非常に宗敎の思想に富み、禮義を重んずる民なるを認めたり。諸君の恭敬する尊師聖賢曰く、人百年の生を保ち、終生宗敎の式を守り、神佛に奉物を怠らざるも、是れ單純なる慈悲の一行にしかずと。釋尊は諸君に敎へて上下、遠近、今後の差別なく、衆生に對する善悲に就きて默思せしむ……。

今余が諸君に紹介せんとするものは、神の子にして神靈の現出、神愛の合成體なり、以て釋尊の合兄と稱するも可ならん……。

彼の敎へし所は、釋師の敎へし所と異ならず、唯其語簡短にして明瞭なるが上に、釋尊の達せざる事に及ぶ。基督は衆生に示すに、神は萬人の父にして至善なるとを以てせ



り、釋氏の以て免るべからざるものと敎へられし罪科は、神の聖子の行爲と、死に於ける神愛に由りて、全く洗淨し得るの道を開きたりと云々。

無宿童子の友人、異敎信者の辯護人なる、チャレース、ローリング、ブレース氏は、過る夏アルプス山中チロル州「かむぷるふえる」に永眠す。或る宗敎新聞は、氏の基督敎外の宗敎に眞理あるを論じて誤謬を揭ぐると足らざるを以て、氏の著述に對して冷評を下したり、且つ氏の現在の敎會に關する意見は、職を傳道又は牧會に執るものゝ甘受せざる所なるべし。然れども此罷の批評は、ブレース氏の意に介せざる所なるべし。知らず最終判決の日、綿羊と山羊と撰別せらるゝ時「吾父に惠まるゝ者よ、來りて創世より以來汝等の爲めに備へら